

沢田鍋土遺跡

発掘調査報告書

1995-3

中野市教育委員会

沢田鍋土遺跡

発掘調査報告書

1995-3

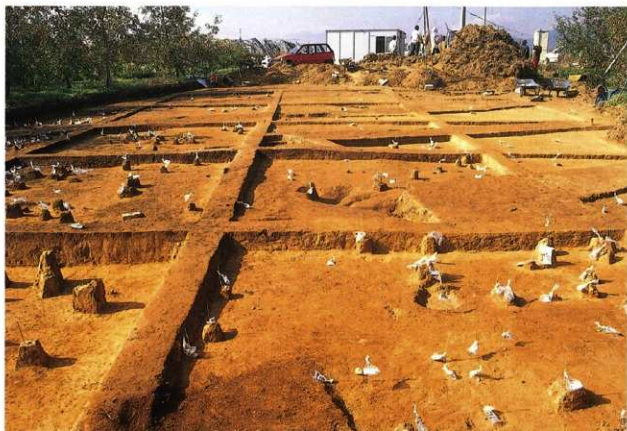
中野市教育委員会



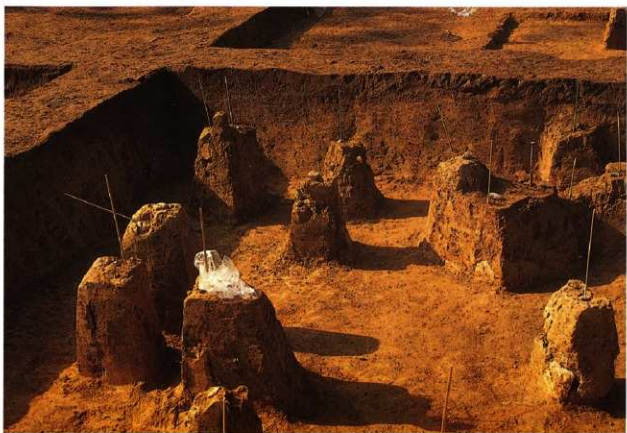
調査区



調査区



調査区



遺物分布集中域近影



遺物分布集中域近影



第1号住居址 炉址



筑掘風景



筑掘風景

刊行にあたって

今回の沢田鍋土遺跡の調査で、約3万年前の後期旧石器時代の初頭と考えられる石器群が発見されたことは思いもよらないことであった。この発見によって中野市の歴史は遙か太古にまでさかのぼることとなった。場合によってはさらに古い時代へ遡る可能性もあるという。

中野の大地には、氷河時代から脈々と続く先人達の足跡が刻み込まれている。私達はこうした先人達の歴史を長く後世に伝えるために、微力ながら埋蔵文化財の保存や開発との調和に努めてきたが、今後も努力していくつもりである。

平成7年3月

中野市教育委員会

教育長 小林 治己

緒言

1 本報告書は中野市高丘9号線道路新設工事にともない実施した埋蔵文化財の調査報告書である。

2 調査は中野市教育委員会（教育長 小林治己）が実施した。

3 今回調査した沢田鍋土遺跡は上信越自動車道建設に伴う遺跡分布調査によって新たに発見されたものである。すでに、部分的に長野県埋蔵文化財センター、中野市教育委員会によって調査されている。

4 今回の発掘調査は平成6年11月～12月、整理作業は平成7年1月～3月まで行った。

5 発掘調査等専門的な事柄については、中野市文化財保護審議会会長金井汲次の指導のもと中島庄一、関 武が担当した。

6 調査報告書は金井汲次の指導を受け、中島庄一と徳竹雅之、関 武が共同執筆した。

本文目次

第I章 位置と立地	1
第1節 位置	1
第2節 立地地形	4
第3節 周辺の遺跡	4
第4節 基本層序	5
第II章 旧石器時代	5
第1節 概要	5
第2節 遺物の遺存状況	5
第3節 遺物	6
第III章 縄文時代	18
第1節 概要	18
第2節 遺構	18
第3節 遺物	18
第IV章 古墳時代	23
第1節 遺構	23
第2節 遺物	27
第V章 古墳時代以降	28
第1節 遺構	28
第2節 遺物	28
第VI章 まとめにかえて	29
第1節 旧石器時代	29
第2節 縄文時代	61

第1章 位置と立地

第1節 位置

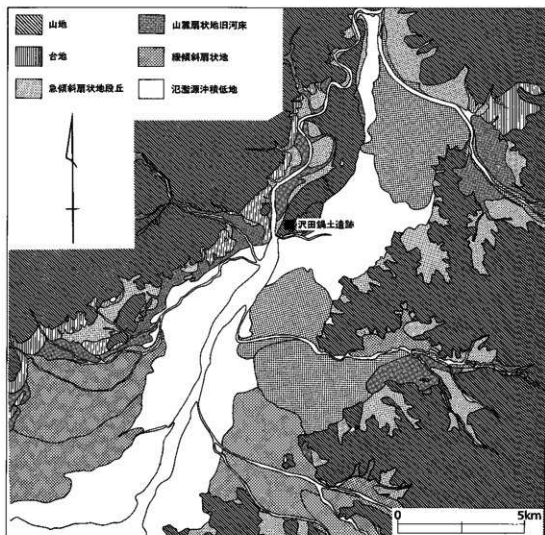
沢田鍋土遺跡は東西10、南北30kmの広さをもつ長野盆地の北端、長野県中野市大字立ッ花字鍋土に所在している。中野市は長野盆地の集束する部分にあたり、西縁部をなす丘陵と盆地部に形成された扇状地地形からなる。遺跡は盆地の西縁をなす高丘陵上にある。高丘陵は長野盆地の北西縁部を形成する丘陵地形の一部であり、盆地底部との比高60mを測るならかな丘陵である。

遺跡のある長野盆地の北西縁部は、盆地の西を西する西部山地と丘陵地帯、盆地部とで構成されている。西部山地の頂部は平坦な地形をなし、前期

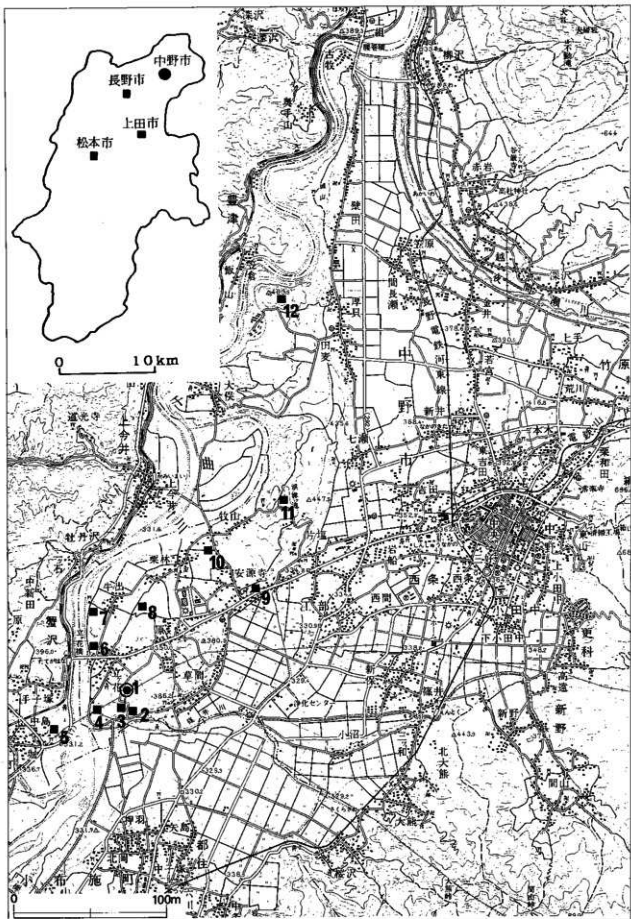
更新世から中期更新世にかけて形成された原初の準平原と考えられる。丘陵地帯は西に高い階段状の地形をなし、盆地部とは直線的な急崖で接している。

丘陵地帯は長野盆地の主軸方向と同じ、南東から北東方向に並ぶ二列の丘陵群に分けられる。西部山地より南から豊野、赤塩、奥手山丘陵が、その東側に南郷、高丘、長丘陵が並び、西部山地よりあるものほど、比高、規模ともに大きく、基盤となる地質も古い傾向を示している。

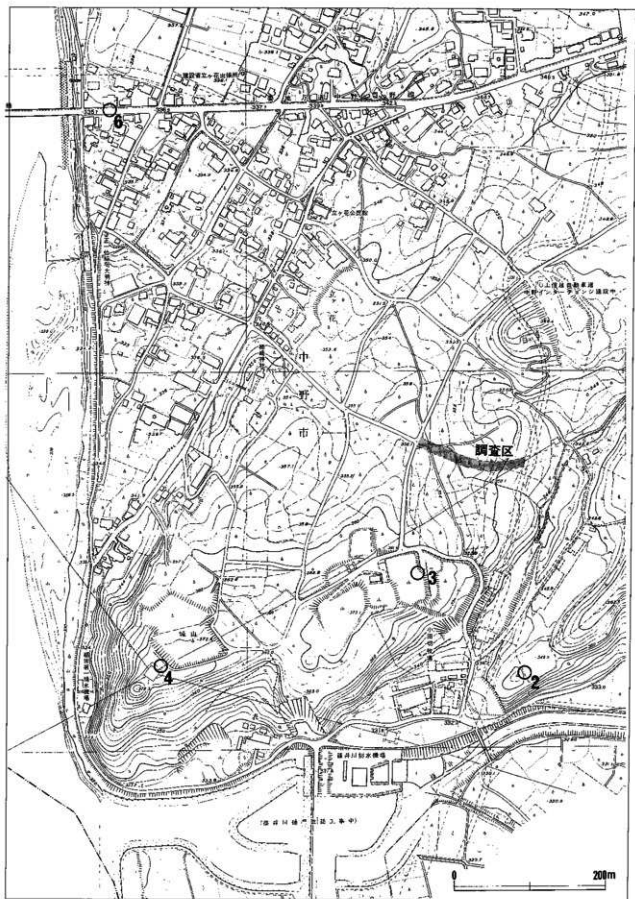
遺跡の立地する高丘陵は長丘陵と連続し、



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡の位置



第3図 調査区と立地地形

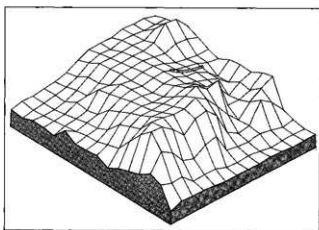
盆地の北西縁部を形成し、千曲川を挟んで、西側の豊野、赤塩、奥手山丘陵へと続く。千曲川はいわゆる先行性の河川で、丘陵地帯が隆起する以前の原位置を保っているものと考えられる。連続する高丘、長丘丘陵は西部の豊野、赤塩、奥手山丘陵から、千曲川によって分断され、盆地部に向かって、南西にのびる半島状の地形を成している。高丘丘陵はその先端部分にあたる。

第2節 立地地形

遺跡は盆地底部に向かって、南に延びた高丘丘陵の先端部分に位置している。丘陵の先端部分には、小さな谷が南にむかって形成され、丘陵を東西に二分している。谷の奥行きは約500mと短く、谷の最奥部と盆地底部との比高は約60mを測るが、遺跡が形成された後も高丘丘陵は隆起を続けているものと思われ、遺跡が営まれていた時点での比高差は小さかったものと思われる。谷は丘陵へ400mほど入り込んだ部分で、西方向に延びる小さな枝谷と北方向に延びる主谷との二つに分かれる。

調査は谷を300m程奥に入った部分の東斜面、枝谷の方向とほぼ平行して、主谷に直交する道路新設工事に伴うものであった。したがって、調査区は谷の西側丘陵の頂部から、谷に向かって急激に落ち込む直前までの部分を横断するように、幅約18m、長さ約150mの部分である。

平成5年、沢田鍋土遺跡は谷に向かって急激に落ち込む斜面部分を中心に、今回の調査区に直交する部分が調査され、旧石器、縄文、弥生、奈良



第4図 遺跡周辺の地形

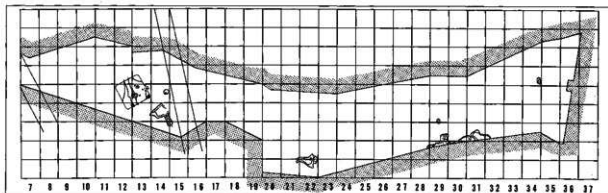
時代遺構や遺物が発見されている。

第3節 旧石器時代の遺跡立地と周辺の遺跡

今回の沢田鍋土遺跡の調査では武蔵野台地のⅠ層段階以前、県下では最古段階の旧石器時代の遺物分布集中域が発見されたが、周辺にもA T層順ないしA T下位に位置すると考えられる石器群が発見されている。

それぞれの石器群は丘陵の先端部に形成された谷を中心に、谷の西側に立ヶ花表遺跡（台形椀石器）、沢田鍋土中野市第1次調査地点（台形椀石器）があり、谷の東側丘陵先端部の西斜面には、今回の沢田鍋土遺跡とほぼ同時期と考えられるがまん淵遺跡（未報告・長野県埋蔵文化財センター調査）がある。

丘陵は旧石器時代の遺跡が営まれた以後も隆起を続けているとされ、当時の盆地部と丘陵の比高は現在よりも小さかったものと思われる。おそらく、谷も浅く、盆地に面した入り江状の景観を呈



第5図 グリッドと遺構配置図

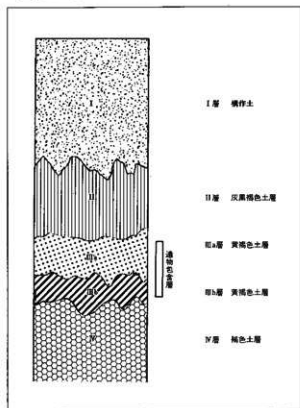
していたのではなからうか。この谷をとり囲むように、後期旧石器時代直前あるいは前半の規模の小さな遺跡が分布している。

第4節 基本層序

高丘陵の考古学的な層序区分は行われておらず、遺跡の基本層序を明言することはできない。

沢田鍋土遺跡では梗言的に、色調や粒子、混在物から次のように区分している。

I層を耕作土、II層を灰黒褐色土で弥生時代後期、縄文時代の遺物を包含している。乾燥すると灰色が強くなり、極めて堅くなる。III層は黄色味の強い褐色で、上層の影響を受けてやや褐色味の強い部分でやや赤い粒子を少量含む部分（a層）と黄色味が強くやや赤味の強い粒子を含む（b層）に細分できる。旧石器時代の遺物が含まれる。IV層は黄色味の強い褐色土で、粘質があり、上部にはクラックが発達し、平面的に見ると亀甲状を呈している。また拳大の堅いブロックが含まれている。V層はオレンジ色の粘質の強い土層で、縞状に白色土が認められる。



第二章 旧石器時代

第1節 概要

旧石器時代の遺物が、調査区の西側に偏って発見された。包含層は第III層である。基本層序の項でも述べたが、高丘陵の層位区分はその端緒についたばかりで、第III層の堆積年代は不明である。

遺物は比較的広い範囲に認められたが、4～5群に区分される。

出土した石器類はスクレイパー状に二次調整のある剥片石器、二次調整のある剥片、剥片石核などがある。

D13グリッドでは礫が数個、まとまって検出されているが、いわゆる礫群とはできない。

使用されている石材には安山岩、頁岩、チャート、グリーンタフなどがある。

第2節 遺物の遺存状況

1 位置と立地

石器類は東西に細長い調査区の西側、頂部からやや下った緩やかな斜面に、幅約16×長さ約72mの範囲に分布していた。

石器類の出土地点をやや広い範囲で概観しよう。丘陵の先端を東西に二分するように、北に向かって入り込む主谷に、西から直交するように形成された小さな枝谷が認められる。丘陵の先端からは約400m程の地点であり、主谷の斜面から枝谷の谷頭までは約150mほど入り込んでいる。

調査地点は主谷と枝谷に挟まれた東斜面の部分で、主谷の斜面から150mほど奥までおり、枝谷の谷頭とはほぼ同じ距離である。枝谷はやや北に湾曲しながら南西に向かって入り込むため、主谷と枝谷に挟まれた丘陵は緩やかな斜面をもつ舌状を呈している。石器類が発見された地点は舌状の丘陵の根元からやや奥に入った地点になる。

2 分布

石器類は調査区の幅（約16m）で約72mほどの広い範囲に広がる。全体的にみれば分布の密度は低く、散漫な平面分布である。分布の密度から4群ないし

5群に分けることができるが、それが有意のものであるかどうかははっきりしない。

第Ⅲ層の上部から下部にわたって、遺物が検出されている。石器類と同時に小石が検出され石材と石材の分布 安山岩、頁岩、チャート、黒曜石、グリーンタフなどが使用されている。

第1遺物分布集中域 (F~G, 10~11)

調査区の最も西側、標高の高い部分に位置している。

石核1、剥片2、チャートの小礫5からなる。

第2遺物分布集中域 (G~D, 12~15)

最も遺物量の大きい集中域である。定形石器としての形態を有していると思われるもの5、二次加工の認められる剥片4、石核4、剥片51、敲打器1の総数65からなり、その他にチャート小石が48ヶ確認されている。

分布状況を見ると、主に遺物が分布する部分から北に離れて剥片が数少ないが分布しており、独立した

ものか、第1遺物分布集中域に含めるか判断に迷う。

第3遺物分布集中域 (F~G, 16~17)

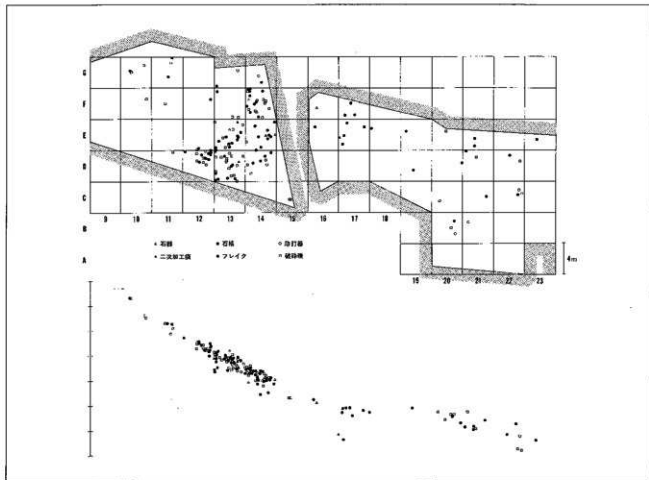
定形石器としての形態を有しているもの1、二次加工のある剥片1、石核2、剥片7から構成されている。このグリッドにはチャート小石は認められなかった。

第4遺物分布集中域 (B~F, 19~23)

広い範囲に遺物が散漫に分布しており、いくつかに分けて考えるべきなのかも知れない。石核1、剥片10、敲打器1からなる。

第3節 遺物

石器類には僅かに二次調整が認められ、利器として利用されたと思われるものがあるが、これまで旧石器時代の定形的な石器とされるような形態を有するものはない。したがって、二次調整のある剥片、石核、剥片等に分類した。どの部分が刃部として利



第6図 遺物分布

用されたか明確でなく、実測図では打点を上において描写している。

1 二次調整の認められる剥片石器（第12図1～8）

二次調整が認められる剥片で、今日の我々から見て利器としての形態を有しているもの。

1は縦長傾向の強い頁岩製の剥片を素材として、右側縁の先端部分から半分以上の部分に剥離角が急で小さな剥離が連続的に認められる。剥片基部の右側縁に認められる平坦で大きな剥離痕は連続する小さな調整剥離以前の段階のものである。打点の位置や方向は剥片剥離の打点や方向とほぼ同じであり、これらの平坦な剥離を調整剥離とするか否か判断に迷う。

2は一側縁が厚い方横広剥片を素材としていると思われるのだが、主要剥離面が確認できない。ほぼ三角形に近い平面形態を呈し、いずれの縁の方向からも剥離が行われている。実測図上、下方にした部分は裏面から表面の方向に急角な剥離が認められる。また、上方にした側縁にはマイクロ・コンタクト・フラクチャーが認められる。

3も平面形態が三角形を呈する剥片であり、表面には原石面を広く残す。右側縁に表面からの急角な剥離が認められる。これらの剥離と主要剥離の切り合い関係は不明瞭だが、主要剥離を切っているよ

うに思える。

左側縁の基部近くに、マイクロ・コンタクト・フラクチャーと線条痕が認められる。

5は扇形の平面形態を有する頁岩製の剥片を素材として、基部の部分に剥離が認められるものである。剥離は表面を中心として、平坦である。

2、3、5はいずれも底辺の大きな三角形であり、その頂点を挟む両側縁に判然としなが、調整剥離が認められるという特徴を共有している。積極的に定形石器とすることはできないが、底辺の広い三角形への志向性を考えることはできると考える。

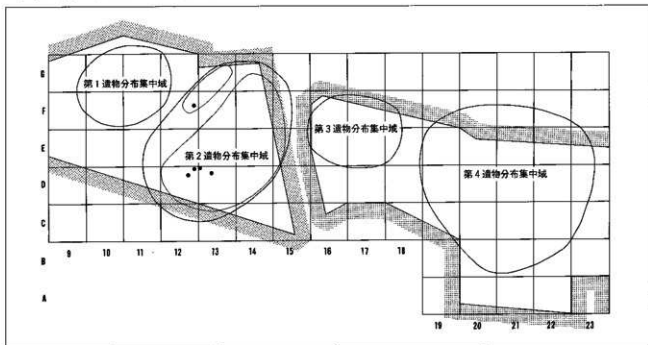
4は小さな横広の頁岩製剥片を素材とし、基部の両側縁に平坦な調整剥離が認められるものである。右側縁基部に認められる調整剥片は素材剥片剥離の前段階で生じた剥離痕を利用したものかも知れない。

6は横広剥片を素材として、基部の表面、両側縁に平坦な剥離が認められるものである。

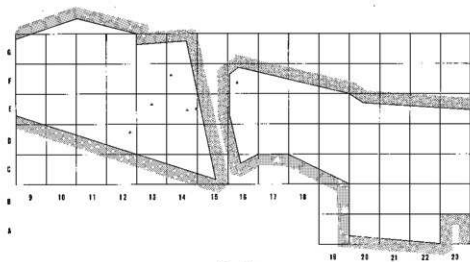
7は原石面の広く残る頁岩製の横広剥片の打面側からファシット状の剥離が施されている。ファシット打点付近には加撃痕が認められ、意識的な剥離であったことが理解される。

8は両端打撃の剥片である。

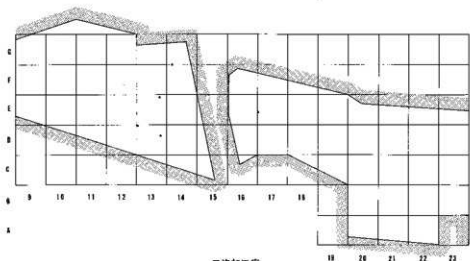
9は安山岩製の断面三角形の分厚い縦長剥片を素材として、その右側縁に調整剥離が認められる。潤



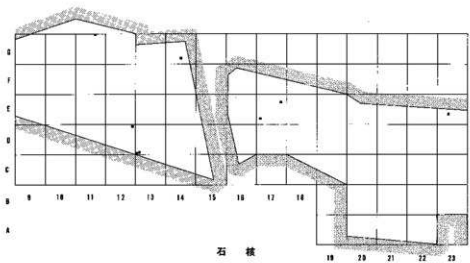
第7図 遺物分布集中域



石 器

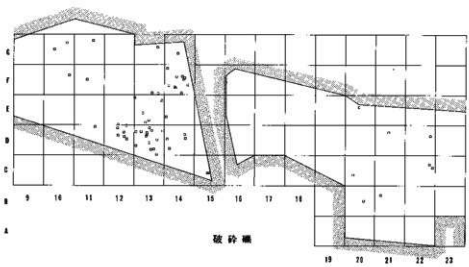
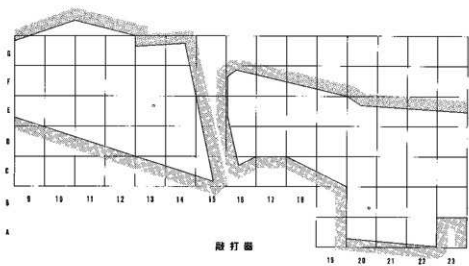
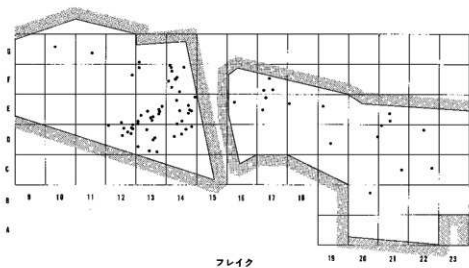


二次加工

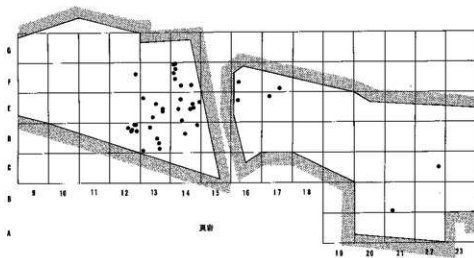


石 核

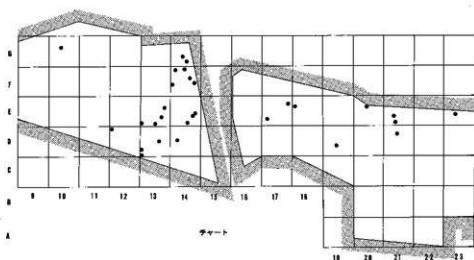
第8图 遺物分布



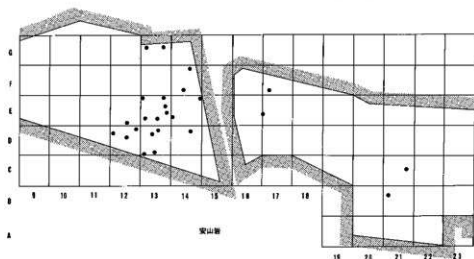
第9図 遺物分布



1

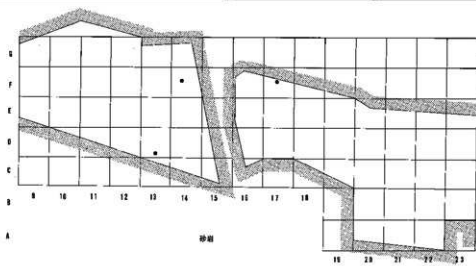


2

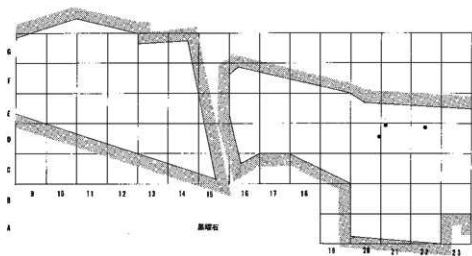


3

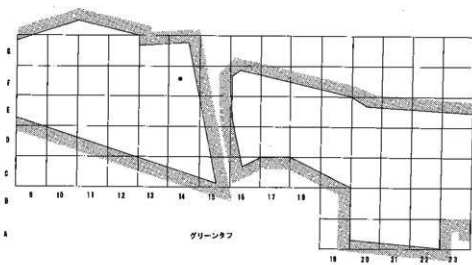
第10図 遺物分布



4

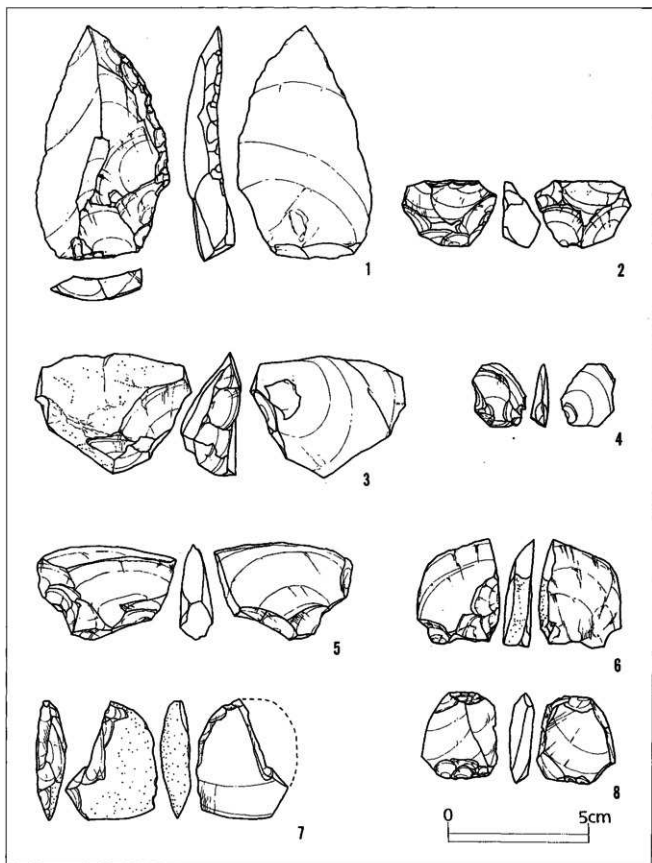


5

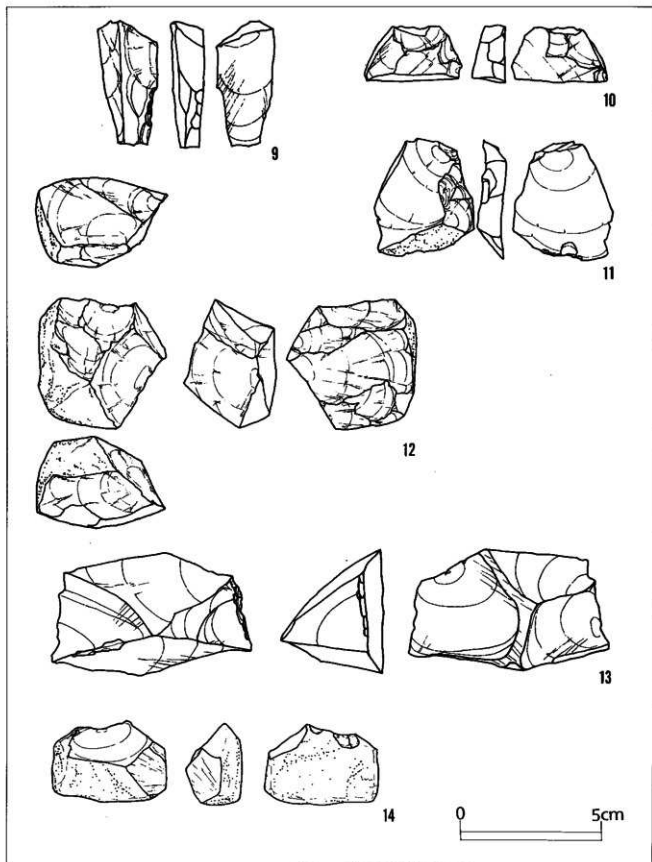


6

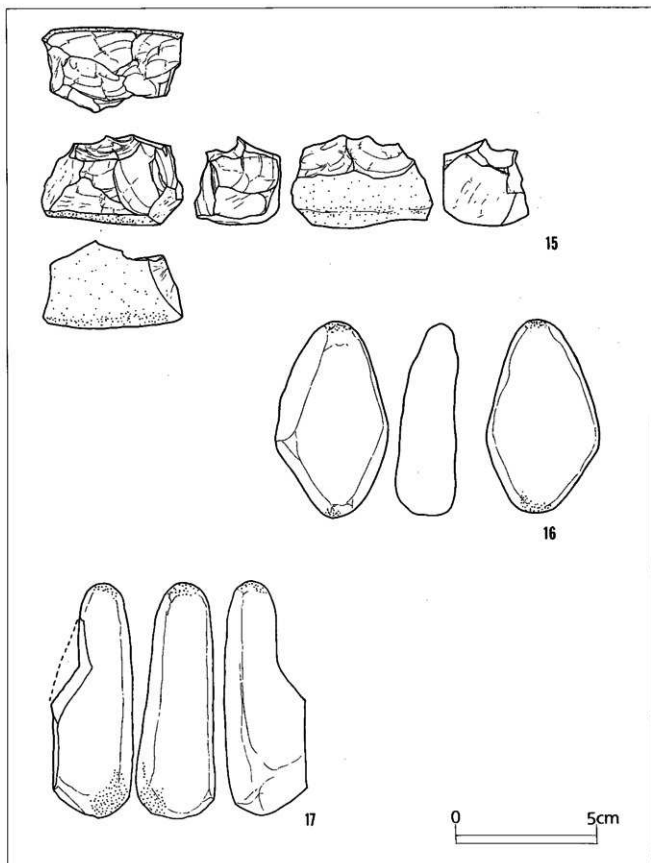
第11図 遺物分布



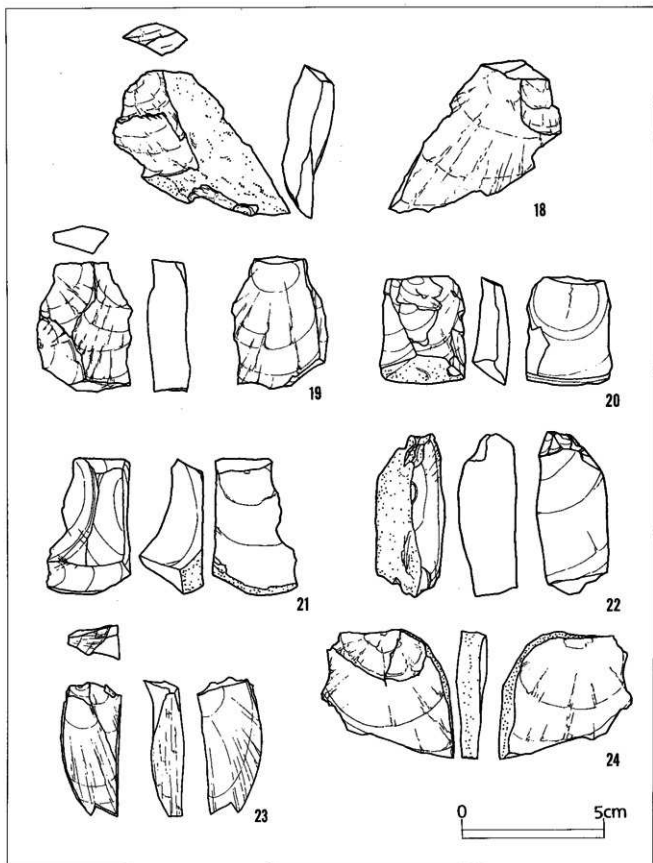
第12図 遺物 (1)



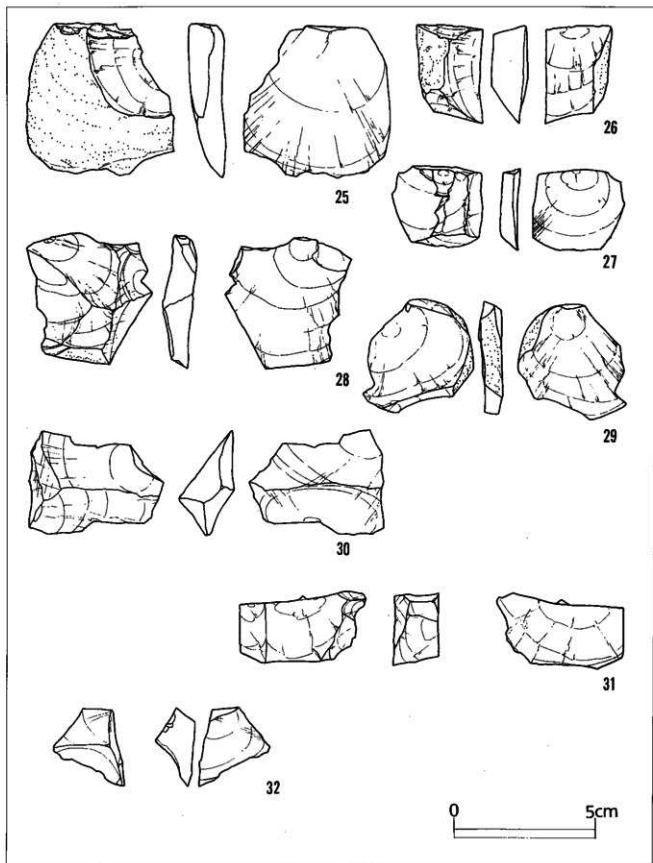
第13圖 遺物 (2)



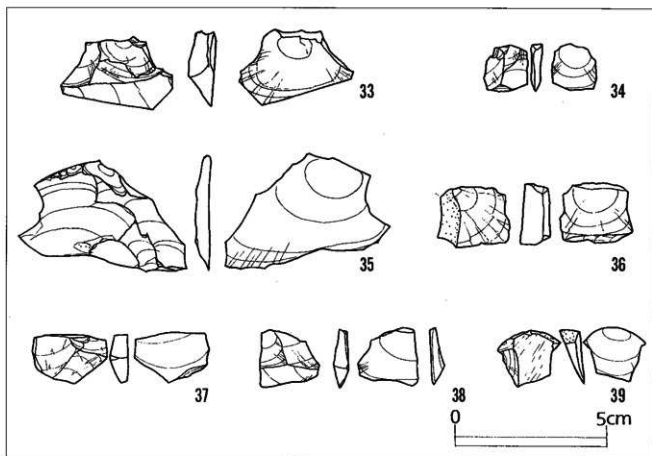
第14圖 遺物 (3)



第15图 遗物(4)



第16圖 遺物 (5)



第17図 遺物 (6)

整剥離の剥離角は急角度ではあるが、ナイフ形石器に見られるそれよりは小さく、連続的ではない。

10は安山岩製の横広剥片を素材に用いていると考えるが、途中で欠損、あるいは切断されているためにその全形を知ることはできない。打点近くに、調整剥離が認められる。

11は縦長に近いチャート製の剥片を素材としている。右側縁に表面からの剥離が認められる。剥片剥離以後の調整剥離か、剥片剥離以前のものであるか判然とし難い。剥片先端の角を扶んで、マイクロコンタクト・フラクチャーが認められ、利器として利用されたことは確かである。

2石核 (第13図12~14、第14図15)

12は安山岩製。小さな礫器状の形態をなす。打面調整は認められず、打面の位置も大きく移動する。

13は頁岩製。採集時には偏平なピラミッド状を呈している。大きく荒削した石材の平坦面を作業面として、周囲の側面を打面とする。打点は移動をくり返し、結果的には全周周から剥片剥離が行われる。左

側縁にマイクロ・コンタクト・フラクチャー様の剥離が認められ、石器として利用された可能性がある。

14はチャート製。小さな円礫を母岩とし、小さな横広剥片を剥離している。この例では剥離された剥片の枚数は限られている。礫器の可能性も否定できない。

15はチャート製。細長い円礫を母岩とし、一側縁は表裏面に剥片剥離が行われている。

3敲打器 (第14図16、17)

16、17は小形の円礫の両端に敲打痕が顕著に認められる。

4剥片 (第15図18~第17図39)

剥片には全長3cm以上のものとそれより一回り小さなものがある。また、やや縦長の志向性が高い剥片と横広の剥片がある。

どの剥片にも打面調整は認められず、剥片も厚い。打撃方向と剥片の長軸の方向は18を除いて、ほぼ一致する。母岩の表皮を残すものが多い

第Ⅲ章縄文時代

第1節 概要

縄文時代の遺構は中期末葉の不定形の土坑が1基検出されたのみである。遺物はこの土坑から出土したものが大半であるが、調査区の東部分に分布した粘土採掘坑の覆土から縄文土器片や打製石斧などが出土しており、周囲に集落址が想定される。

第2節 遺構

第1号土坑(第23図1)

①位置

A20~21、B21グリッド

②検出

Ⅲb層の上面。検出面で土器、打製石斧、剥片が検出されている。

③規模と形態

長軸467×端軸300cm、深さ約66cmの不定形な長楕円形。壁がオーバーハングし、袋状をなす。

④遺物出土状況

1層から2層の上面にかけて、土器や石器類が集中していた。剥片やチップの多くは1層の上半部から検出されている。

⑤覆土堆積状況

⑥出土遺物

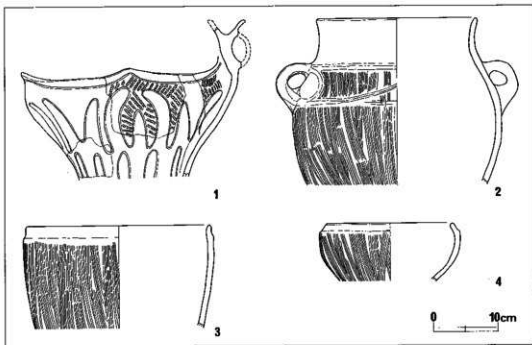
加曾利E様式末葉の土器、打製石斧、石鏃、剥片、チップ、打製石斧と剥片が接合するものがある。

第3節 遺物

第1号土坑出土の土器(第18図1~4)

出土した土器はいずれも中期末葉、加曾利E様式の第Ⅶ段階に相当するものと考えられる。全体として一括性の高い資料であるが、第19図1のようになや古い様相をもつ土器片が僅かながら混入している。実測図にまで復元できたものは4例のみであるが、いずれも中期末葉の特徴を有している。

第18図1は対向するU字状文が沈線十縄文で施されるキャリパー形の深鉢形土器である。胴



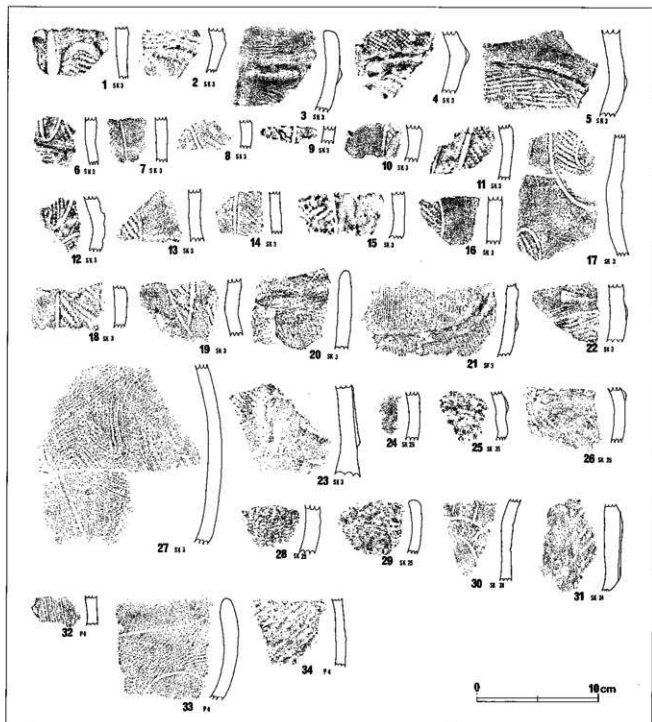
第18図 第1号土坑出土の縄文土器(1/6)

下半部を欠損する。

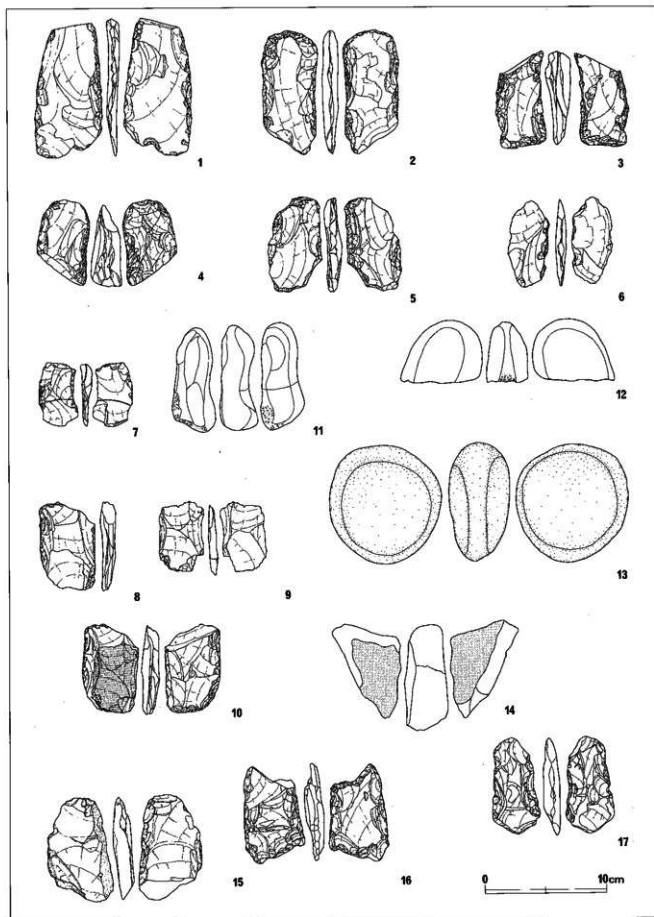
口縁は四単位で、大きな握手状の突起と三つの小さな突起からなる。胴上半部には、逆さ向きのU字状文が二重に重ねられたようなモチーフが施文され、下半部には細い逆さ向きのU字状のモチーフが施文されている。

第18図2は両耳壺形土器であるが、胴部の湾曲が緩やかで、やや長目の球状になるか、緩やかに湾曲しながらそのまま底部へといたる長い胴部のものなろう。

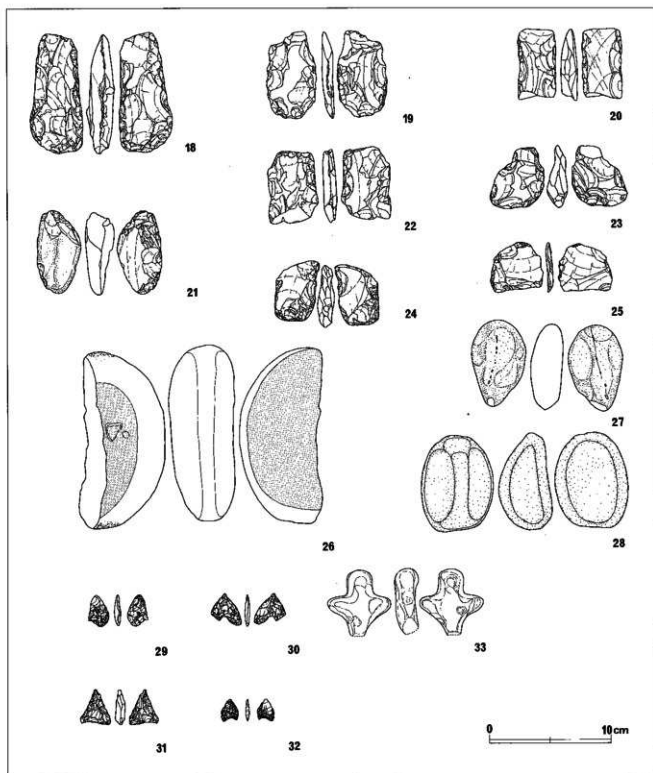
頸部に横状の握手が一つつけられ、両脇を強く撫でつけられた隆起線文で文様が施文されている



第19図 縄文土器



第20回 縄文時代の石器



第21図 縄文時代の石器と土製品

る。

口縁部は無文であるが、頸部以下は地文として、縦方向の条線文が密に施文されている。

第18図3は、下半部を欠損するが、やや湾曲しながら底部にいたる深鉢形土器で、口縁部に凹状の沈線が一条巡らされ、それより下位は縦方向の条線文が施文される。

第18図4も胴下半部を欠くが、キャリバー形の深鉢形土器である。口縁部に凹状の沈線が一条巡らされる。以下は縦方向の条線文が施文される。

出土した土器片には①隆起線文と縄文で文様が構成されるもの(第19図3～5)、②沈線と縄文で文様が構成されるもの(第19図6～19)、③条線文が施文されるもの(第19図20・21・27)がある。第19図1はやや古い段階のものと思われるが、他はほぼ同時期のものであろう。第1号土坑出土の石器(第20図1～14)

第1号土坑からは打製石斧6点、打製石斧調整剥片4点、甲石1点、磨石2点、石皿1点が出土している。

打製石斧(第20図1～4・8)は完形品が1点、他の5点は欠損している。第○図1は薄い剥片の側縁に簡単な調整剥離が施されている。2は刃部を欠損する。やや厚めの横広剥片を素材としている。3も中程で欠損する。厚い横広の剥片を素材としている。ほぼ中央に、加撃されたが、剥片が剥離されずに残っている。打製石斧の幅全体に及ぶ、大きな剥離である。なぜ、途中で剥離が中断してしまったのか不明である。4は中程で欠損する打製石斧の頭部である。厚めの横広剥片を素材としている。

打製石斧調整剥片(第20図5～7・9)には刃部調整剥片(第20図7・9)と側縁調整剥片(第20図5・6)がある。

5は刃部に近い部分の側縁部調整剥片を素材に他の石器をつくらうとして、さらに調整剥離が加えられたが、何らかの理由で廃棄されたものであろう。前段階で調整された刃部と両側縁の剥離痕が残っており、右側縁には表裏面の調整剥離痕が認められる。また、通常の打製石斧程度の厚さを

もち、側縁部調整剥片としては大きなものである。製作の途中での失敗したものではなかろうか。

第20図8の打製石斧の欠損品と第○図9の刃部調整剥片は接合し、第20図10のような打製石斧の欠損品を復元できた。

第1号土坑で検出された打製石斧の調整剥片はいずれも、打製石斧の調整剥片としては大きめのものである。接合した10の例では刃部調整によって、刃部の厚さの約二分一が失われている。また、5の例では打製石斧の製作が中断されたものと思われる。

こうした大きな調整剥離は、側縁部調整剥片を例にとると、表面を調整剥離する場合には、裏面の側縁やや内側が打点になっている。そのため、調整剥片打点部分には前段階の調整剥離痕が観察される。

その他包層等出土の遺物

土器(第19図 24～25、28～34)

小片で、しかも摩滅が著しく、所属期等が不明なものが多い。条線文の施文された31、32は中期末葉、30は沈線と縄文で帯状の曲線的な文様が施文されている。後期初頭ないし中期末葉の所産であろうか。34は沈線と縄文で文様が施文されたものであり、中期末葉のものであろう。

石器(第20図15～17、第21図18～30)

打製石斧8、石鏃2、剥片石器1、剥片1、磨石2、凹石1がある。

打製石斧は第21図18を除いて、欠損している。23、25は調整剥片の可能性が高い。石鏃は2点はいずれも欠損している、土偶(第21図32)

十字形をした板状の土偶である。

第IV章 古墳時代

住居址1、粘土採掘坑と考えられる土坑2が検出されている。

第1節 遺構

第1号住居址（第22図）

①位置

D12、13グリッド。

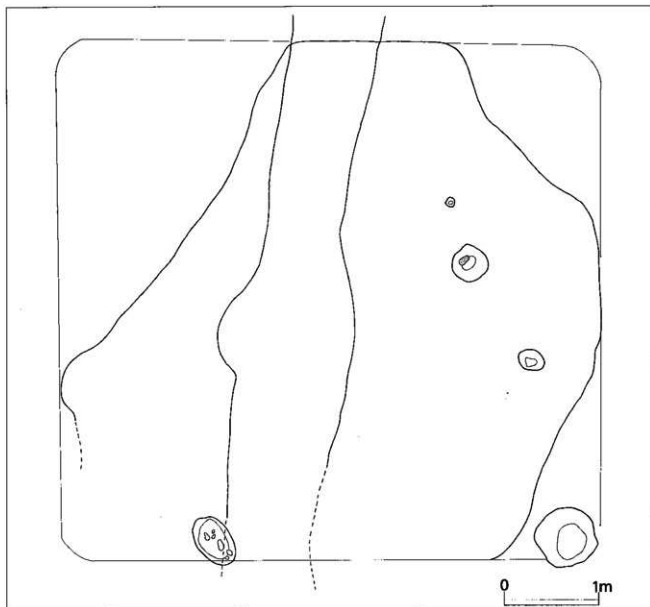
②検出

Ⅱ層の下部で検出したが、上部の大半は削平され、僅かに覆土を検出したのみである。検川段階ですでに炉址が認められるような状況であった。

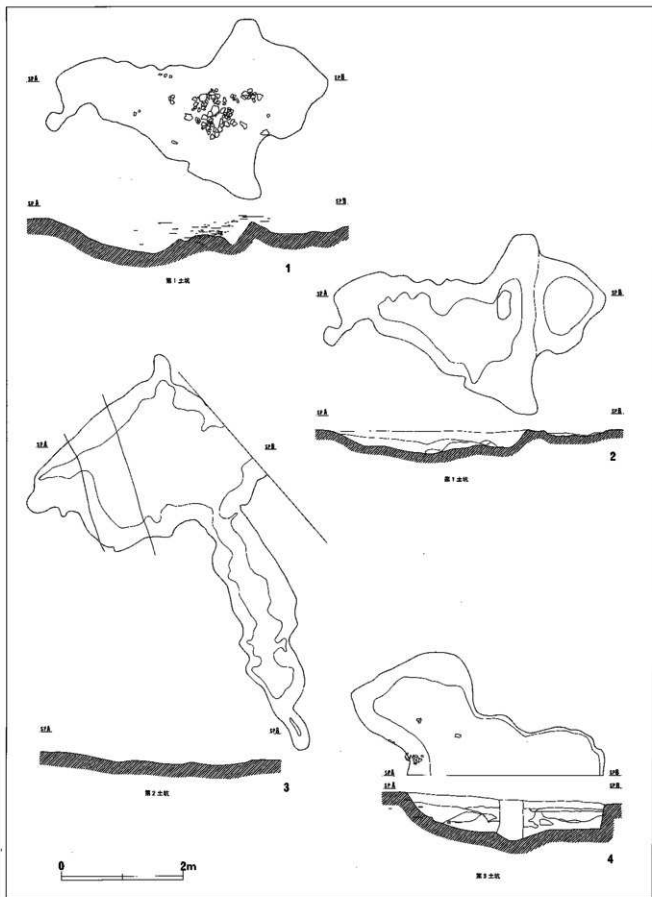
③規模と形態

大半の覆土が失われており、その全形を知ることができないが、1辺約5mの方形になるものと思われる。

④壁



第22図 第1号住居址



第23図 縄文時代・古墳時代の土坑

北壁の中央部分の僅かな壁の立ち上がり以外は検出できなかった。

⑤床面

軟質で不明瞭であった。

⑥柱痕

南壁、炉址東側、北壁の3ヶ所に検出したのみである。

⑦炉址

北西隅に偏った部分に検出した。直径約40cm程の皿状の落ち込みで、礫が横たわっていた。また、炉址の壁を覆うように半円形に土器片が据えられていた。

⑧周溝

周溝は認められなかった。

⑨備考

南壁のピット内より、土器片とともに焼上、炭化物が検出された。覆土は固くしまっていた。

第2号土坑 (SX02)

①位置

C~D14, C15グリッド。

②検出

Ⅲ層上面。

③規模と形態

不定形に溝状にのびる長軸700cm、短軸30cm、深さ12cm。

④遺物出土状況

1層中~下面に集中していた。

⑤遺物

第3号土坑 (SK-24)

①位置

B~C, 29~30グリッド。

②検出

I層直下。

③規模と形態

調査区外に延びる、長軸950cm、短軸240cmの不定形。

④遺物出土状況

2・3層中に土器片が集中していた。

⑤遺物

⑥備考

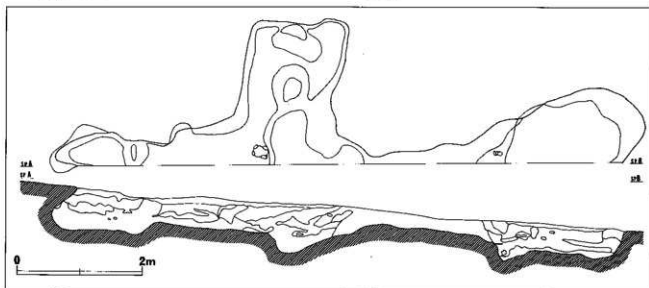
粘土採掘坑と考えられる。

第4号土坑 (SK23)

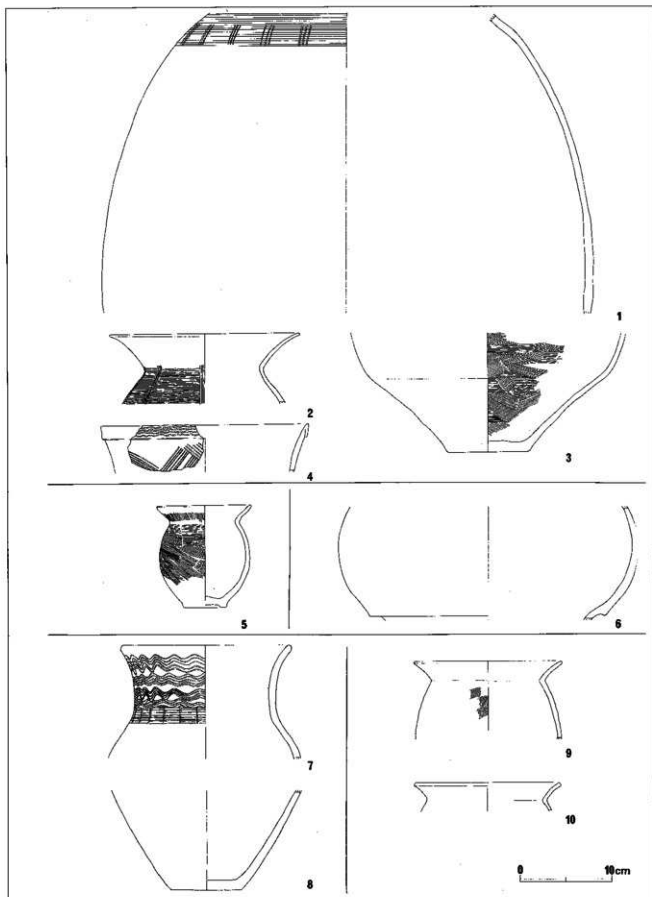
①位置

C, 31~32グリッド。

②検出



第24図 第4号土坑



第25図 遺物

I層直下で検出。検出作業中に小型の甕形土器が出土した。さらに、調査区の南側に遺構はひろがっている。

③規模と形態

平面形態は不定形。長軸4200×短軸200cm、最深約50cmを計測する。

④遺物出土状況

検出面でミニチュアの甕形土器が検出された。

遺物は南西側に偏った覆土5層下面に集中していた。

⑤覆土堆積状況

1～6層に区分される。流れ込み状の堆積である。

⑥時期

古墳時代

⑦備考

覆土の堆積状況から、粘土採掘穴であると判断される。

第2節 遺物

第1号住居址出土の土器(第25図1～4)

1は大きな箱清水形の甕形土器の胴部、口縁部と胴下半部を欠く。頸部に櫛描横走直線文が施文される。全体にヘラ磨きされ、赤色塗採されている。

2は甕形土器の口縁部、典型的な箱清水形の甕形土器と比較すると、頸部の急激にくの字状に外反し、口縁部の外反の仕方でも直線的である。赤色塗採はされていない。

3は甕形土器の下半部。箱清水形の壺に見られる独特の屈曲が認められるが、赤色塗採はされていない。内面にハケ成形痕が目立つ。

4は箱清水形の甕形土器。口縁短部は折り返し口縁となり、櫛描波状文が施文されている。頸部以下は粗い櫛描縦走羽状文が施文される。

奥信濃においては、櫛描縦走羽状文は中期後半の甕形土器に認められるものであるが、系譜として直接結び付くのであろうか。場合によっては、

他地域から逆輸入された可能性もある。今後の資料の蓄積を待ちたい。

第1号土坑出土の土器(第25図5)

ハケ整形痕を残し、口縁部がやや内湾しな

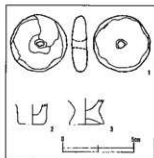
がら、「く」の字状に外反し、胴部中位に最大胴部径をもつ小型の甕形土器である。焼きひずみがあり、正確な器形が計測できなかった。胴部がもう少し膨らみ球形に近い形になる可能性がある。底部は内側にやや入り込む。

第2号土坑出土の土器(第25図6)

甕形土器の胴部下半部である。胴部と底部の間は鋭く屈曲し、段をもつ。表面は研磨されているが、赤色塗採はされない。

第3号土坑出土の土器(第25図7～8)

第3号土坑内に潰れるように配置されたように出土した。箱清水形の甕形土器である。7と8は同一個体と思われる。頸部に櫛描縦走直線文が施文され、口縁部には櫛描波状文が施文される。胴部については器表があらわれており、観察することはできない。



第26図 土製品

第V章 古墳時代以降

古墳時代以降のものと思われるものを一括する。遺物等が出土せず、時代判別が不明なものも含めた。

土坑2基と奈良時代の土器がある。

第1節 遺構

第5号土坑(第27図1) SK01

①位置

D21グリッド。

②検出面

Ⅱ層上面。

③規模と形態

100×86cm、深さ60cmの楕円形。

④遺物出土状況

覆土1層の下面から2層の上面に、小さな土器片が出土している。

⑤覆土堆積状況

二層に大別され、覆土2層は固くしまり、灰白色粘土、黄白色粘土、黒褐色土が混入している。

⑥時期

出土した土器片が小片であり、時期判別ができなかった。

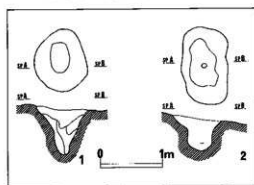
⑦備考

粘土採掘穴と考えられる。

第6号土坑(第27図2) SK19

①位置

F34グリッド。



第27図 土坑

②検出面

I層直下。

③規模と形態

長軸123×短軸76cm、深さ49cmの楕円形を呈する。西壁がオーバーハングしている。

④遺物の出土状況

土器片等は検出されず、底部より木炭片が出土している。

⑤覆土堆積状況

灰白色土の単層。東壁側に黄色粘土が混入する。下部は固くしまる。

⑥時期

出土遺物がなく、不明。

⑦備考

性格不明。

第2節 遺物

変形土器が二個体測図(第25図9、10)でできた。いずれも調査区の東端のグリッドから出土している。中野市第1次調査において検出された住居に関連した遺物であろう。

両例とも口縁部が「く」の字状に外反する、胴部の長い変形土器である。口縁部はヨコナデ整形され、端部は面取りというほど鋭くないが面を形成している。9の胴部にはハケ整形痕が残る。

第Ⅵ章 まとめにかえて

第1節 旧石器時代

1 遺物の遺存状況（遺物分布集中域）

旧石器時代の遺物が集中して発見されることはすでに岩宿遺跡の調査で確認され注意されている。遺物の集中する地点は遺構が検出されにくい旧石器研究では、旧石器時代の生活復元の資料として重視され、多くの解釈がなされてきた。多くの理解はこうした遺物分布集中域が直接的な人間行動の結果であるという前提に立ち、様々な解釈を試みているとして良いであろう。

しかしながら、遺物が集中して発見される事実がストレートに遺跡における人間活動の結果に還元して良いのであろうか。岡村道雄は旧石器時代の遺物出土状況を遺棄と廃棄に区分することを提唱している。この岡村の提案はその後の遺物の出土状況の分析に十分生かされているのであろうか。

ひところ、顕著であった「ブロック」と「ユニット」という用語の並立は姿を潜めてはいるが、並立が抱えていた問題は解決されているのだろうか。

本遺跡においても遺物の集中する部分が検出されているがこれらはどの様な意味を持つかを考える為、一度、旧石器時代の遺物分布の認識のあり方を検討しておこう。

ここでは小田静夫を中心に提唱されたユニットの概念、矢島国雄のブロックの概念、そして安藤政雄氏の遺物集中地点の概念を検討しておきたい。

本遺跡でも認められたように、旧石器時代の遺物がある程度の範囲に集中して発見されることは、岩宿遺跡の調査時点から注意されていた。こうした遺物分布の偏りが、明確に意識されるのは1960年代の後半、旧石器時代の遺跡が面的に広く調査されるようになってからである。

おそらく、野川遺跡におけるユニットの概念の提唱が、それまでの編年的な研究にならざるを得

なかった旧石器時代研究に人間行動の復元という新しい視座を持ち込んだ以後のことであろう。

もちろん、それ以前からもこうした遺物の出土状況が月見野遺跡調査団を中心にブロックと呼ばれていたことは良く知られている。

こうして、ユニットという用語が新たに採用されたことにより、旧石器時代の遺物分布の偏りの表現に「ブロック」と「ユニット」という二つの用語が並存することになる。

では、「ブロック」と「ユニット」という用語が単に遺物の出土状況を指し示す同じ意味をもつ、二つの用語であったのだろうか。否か、二つの用語がもつ意味は微妙にずれているのである。

いまさら、こうした些細な議論を交わすことが無意味なことなのかも知れない。しかし、筆者には現在、定説的に受け入れられている遺物の分布を基本とした遺跡における様々な人間行動の解釈に大きく関与していると考えられるのである。

ユニットとブロックが並存した研究の歴史は単純なものではない。それぞれの用語が持つ意味も当初のものから少しづつ変化しているし、両者の概念がオーバーラップしたり、明確に区分されて使用されていないこともある。

さらに、ブロックとユニットの前提となる遺棄と廃棄という極めて重要な概念が提出されているが、それ以後のブロックやユニット研究に明確に意識されたとするには若干疑問の余地がある。また、若干位相を異にするが原位置論の取扱い方にも同様の疑問がある。

ユニットという概念に基づいた資料分析について、遺物分布の形成がどの様な過程を経たものであるかを明らかにせずに、結果としての遺物分布の偏りにおける石器の器種組成の分析から、遺跡における人間行動にアプローチしているという指摘がブロックを用いる研究者からされている。

この指摘はブロックを用いる意味をたんに表

現している。すなわち、遺物分布の偏りから情報をえるためにはその形成過程について検討すべきであるとする。

このように、両者の違いは単に見かけ上のことではなく、方法論や遺跡のあり方に対する考え方の違いを反映している。

ユニットの概念は遺跡が異なる機能空間から構成されていることを前提としている。したがって、遺物の分布のあり方は機能空間の差異を反映しているとする。

一方、ブロックの概念には単位行動の集積という考え方が背景にある。それぞれの分布の単位が独立的なものと考えられ、接合資料や同一母岩資料は独立したブロック間を移動したと考えられやすい傾向をもつと同時に、それぞれのブロックが固有の単位集団を表現していると考えられる。

ブロックの概念の背景には、旧石器時代研究の当初から指摘されてきた考え方、遺物の集中部分が住居の近くに位置し、石器製作の場であるという考え方がある。旧石器時代研究の初期、旧石器時代遺跡小集団が短期的に利用したもので小規模なものと考えられており、1960年代の後半から70年代にかけて、明らかにされた遺跡の広がりには考慮されていなかったのである。こうした背景ではブロックの概念は有効であった。

が、旧石器時代の遺跡が広い範囲に広がることが明らかになった時点で、遺跡を単に小集団のこした短期的なものではなく、ある程度の期間にわたって営まれた居住空間ではないかという解釈が生まれ、遺跡が異なる機能空間（料理、石器製作、動物の解体など作業、廃棄の場等）から構成されていると考えられた。こうして、遺跡の異なる機能空間を前提とした遺物分布のありかたを考える概念として、ユニットは登場したといえよう。

しかし、旧石器時代の遺物分布が人間行動の結果をそのまま遺存しているかどうか、という側面は積極的に議論されたことはなかったのだろうか。

芹沢長介は神山遺跡の遺物出土状況を観察し、縄文時代の竪穴住居の遺物出土状況との類似性を

指摘し、遺物の分布が直接的な人間行動の結果と考えることに疑義を呈した。さらに、岡村道雄は旧石器時代の遺物分布を遺棄と廃棄に大分類すること提唱し、すべての遺物の集中的な分布から石器製作、動物の解体などの具体的な行動を直接的に導きだすことができないことを指摘している。どうして遺物の分布に偏りという現象が生じているのかを検討する必要もあろう。

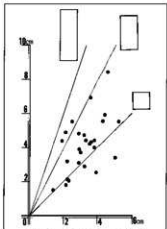
本遺跡の遺物分布は視覚的に4群に区分したのが、区分は主観的なものである。それぞれを第1～4遺物集中域と呼ぶが、その大きさは分布のあり方にも相違がある。

第1遺物集中域は面積も遺物の出土量も少ない。第2遺物集中域は面積も遺物の出土量も大きい。第3遺物集中域は面積も出土石器数も少ない。第4遺物集中域は面積は大きいが出土遺物数が少なく、分布密度が低い。

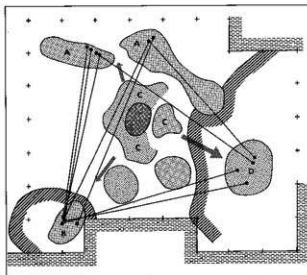
面積の大小から見ると第1+第2遺物分布集中域、第3+4遺物集中域と大小の遺物分布集中域の組み合わせのようにも見える。仮に、第4遺物集中域の遺物分布密度が高ければその類似性は一層際だつてであろう。

それぞれの遺物分布は顕著な石材や機組成のの違いを認めることはできず、①剥片や石核の存在から石器製作という行為、②剥片や石器類が完全に接合しないことから石核や剥片等を持ち出す行為③剥片にのこされたマイクロ・コンタクト・ブランクチャーなどから石器の使用という作業の行為など、重複した情報を読みとることができる。また、遺物の垂直分布や欠落する遺物から自然的な要因などの情報が読みとる必要があろう。

自然の営力の影響を除外したとしても、各遺物分布集中域は様々な行為の集積として考える必要がある。このよう



第28図 剥片の長軸比



第29図 Verberie遺跡

に様々な情報が重複したあり方を考えると、各遺物分布集中域が遺棄された遺物群ではなく、廃棄された遺物群としての性格を強く窺わせていると考える。

ところで、オーストラリアのアボジニティの観察によれば、彼らは特定の地点（水のある地点、そこには動物も集まってくる）に繰り返しキャンプを営む。その地点には以前に占拠した人達の壊れかけた家や石皿が残されている。このように、沢田鍋土遺跡に残された遺物はそう期間を置かない複数回のキャンプの結果として考えることもできる。

また、石器の製作には、とりあえず、その場の作業に必要な石器を臨機的に製作する場合（インスタントな石器）とそうでない石器製作があるとする。インスタントな石器（臨機的な石器）は定形的な形状をもたず、石器の使用目的が達成されれば、その場に捨てられる。一方、定形的な石器は移動の際にも携帯される。

また、Daniel CahenはフランスのVerberie遺跡での遺物分布集中域の構造を次のように解釈している。

この遺跡では炉を中心に6箇所の遺物集中域が検出され、炉の周りには石器や剥片が集中し、石刃剥離が行われていたことが推測される（C地点）。

やや離れた場所に剥片が集積している場所（遺物分布集中域）が形成されているが、石核が含ま

れていない（A～D地点）。一方、接合した石器類は同一の分布領域に分布しない。分布領域は機能空間として区別することはできず、個々の遺物は周辺の遺物とは関係をもたず、固有のライフヒストリーをもっているように考えられる。

蛇足であるが、接合資料の解釈にも触れておきたい。それぞれの遺物分布集中域間には石器の接合関係が認められる。しかし、これらの接合関係はA地点からB地点への製作者の移動、あるいは石核や素材の移動のような直線的な関係を示しているのではなく、炉を中心としたC地点を間に介させた関係であると考えられる。

仮にこうした遺跡の利用や石器製作を考慮すれば、沢田鍋土遺跡の遺物分布集中域の大小というパターン、遺物分布集中域に残されている石器製作、石器の使用、残された二次加工のある剥片などの情報が整合的に理解できるのかもしれない。

まだまだ分析が行き届かず、今後検討を加えて行きたい。

2 石器群の持つ意味

遺跡周辺の地質的な調査が進んでおらず、本石器群を地質学的な根拠をもとに編年することはできない。同時に、編年の指標となるような定形的な石器も含まれておらず、その編年の位置づけはわずかしい。

本石器群の特徴を次のように数え上げることができる。

- 1 縦長剥片を連続的に剥離する技法は含まれていない。
- 2 剥片剥離の方法には

①拳大の礫を母岩として剥片剥離作業面を次々に打面として作業を進める。両側面、あるいは一方の側面に礫の原面を残すものと思われる。剥片の軸方向と剥離の方向がほぼ一致す横広剥片を剥離する。

②大きな礫を打ち割ったと思われる荒割の素材のもつ面を打面、比較的大きな平坦面を剥片剥離作業面として、平坦

面の周囲から、薄い扇状の剥片を剥離する。

③小さな円礫の一端に稜を作り出すようにして、小さな横広剥片を剥離する。

④拳の約半分程度の礫を素材として、2から3回の剥離ごとに打面を移動させながら横広剥片を剥離するものが認められる。

3 石器の素材には僅かに黒曜石を含むが、大半は頁岩、安山岩、チャートである。

1の縦長剥片の連続的な剥離技法(偶発的な縦長剥片の剥離はのぞく)の欠落は、ここで数え上げた剥片剥離技術が当該石器群のすべてがもつ特徴であり、少なくとも縦長剥片剥離技法はもたないであろうと考えられることから、本石器群がいわゆる石刃技法の出現以前の段階のものである可能性が高い。

2の製作技法は少なくとも本石器群が台形椽石器の出現する段階から、斜軸尖頭器形剥片剥離技術を保有する段階以後のものである可能性を示唆している。

3の石材利用のあり方は、本地域の台形椽石器群が黒曜石を主な素材としていることと対照的であり、先述した1、2と考え合わせると本石器群が台形椽石器群以前の段階に位置していることを示唆している。

以上検討してきたように、いくつかの前提や仮定を持つものの、本石器群が関東地方の台形椽石器群よりも一段階古い段階のものである可能性が極めて高いものと思われる。

石器群の様相から類例を求めれば、福島県平林遺跡の石器群が最も様相的に類似しよう。ただし、打面と作業面を固定して、縦長剥片を連続的に剥離する技法は沢田鍋土遺跡の石器群には認められない。

佐藤宏之は中期旧石器時代の求心剥離技術に基づくシステムが新しい段階になると、小型斜軸剥片系(素刃石器)と新出的な中・大形の斜軸剥片系(縦長指向性をもつ)の二つの剥片剥離技術を並存させる段階にいたるとする(二極分化)。

そして、特定な剥片技術が線形的に発達するのではなく、多種多様な剥片剥離技術が開発・整理される中で、剥離技術全体に影響を与えている縦長指向性が一貫して認められ、この縦長指向性を重視すべきだとする。

中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行期にいたると、縦長指向性は剥片剥離技術において、全体ではないけれども、かなりの部分を占めるようになるとし、次のような変化の特徴を指摘する。

- 1) 打撃軸と縦長剥片の不一致(斜軸)から一致化へ
- 2) 長軸比の等しいすづまりの剥片から長狭化へ
- 3) 剥片(端部)のねじれの補正、ねじれのないものへ
- 4) 剥片の背面剥離痕構成から原礫面等の除去(連続縦打の開始と安定)
- 5) 最も重要な要素である厚みの除去、断面三角形のものから均質な薄片化へ

そして、移行期の石器群の変遷を石子原遺跡(岡村他 1972)→平林遺跡(木本他 1975)→山方遺跡(飯村他 1965、佐藤 1976)とする安斉正人の変遷観(安斉 1988)を採用している。

沢田鍋土遺跡の石器群と、佐藤の指摘した諸特徴の視点にたって検討しておこう。

1) 打撃軸と剥片長軸

すづまりの縦長剥片と横広剥片の両者があるが、縦長剥片の長軸と打撃方向は一例の不一致を除き、一致している。横広剥片の場合には打撃方向が、最大幅にほぼ直交している。

2) 剥片の長軸比

剥片の長軸比はほぼ1対1と1対2の間を中心にばらついているが、1対2以上になる断面の厚い剥片が三例ある。どの程度のもをすづまりと表現するのかが、判断に迷うが石刃技法で剥離されたものと比較すれば、明らかにすづまりと表現して差し支えないと思う。

3) 剥片端部のねじれ

剥片端部が薄く剥離されるもの(フェザー)と剥離が石核に打面と反対側の面にぬけて分厚いものはあるが、ねじれが認められるものはなかった。

4) 連続縦打の開始と安定

出土した石核や剥片を検討するのみでは連続して縦長剥片を剥離する技術は認められない。

打面を転移させるものの中に一つの打面から何枚かの剥片を剥離している例があるが、剥離された剥片はすづまりの縦長剥片になるものと思われる。

5) 均等な薄手化

次々に打面を転移させながら剥離するタイプの石核から剥離された剥片は、薄いとはいえないが、剥離開始部から終息部まで、ほぼ均等な厚さをもっている。剥片の末端部が打面の反対側の面にまでぬけ、分厚いままに終わるものがある。

一方、求心的な剥離をする石核から剥離された剥片の末端部は均等に薄くなる傾向にある。

このように、沢田鍋土遺跡の石器群は佐藤が指摘する中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行期の石器群がもつ諸特徴とほぼ一致しているといえよう。

しかしながら、移行期の石器群の変遷のどの段階に位置づけられるか判断できない。剥片の縦長化とその連続的な剥離が新しい段階に至るほど強くなるとすれば、沢田鍋土遺跡の石器群は移行期の古い段階に相当すると考えることができるのであろうか。

縦長剥片の剥離と横広剥片の剥離の違いは剥片剥離作業面のつくる角度が重要である。いうまでもないことであるが、石刃技法は剥片剥離作業面のなす角度を常に一定に保ちながら、剥離されることにある。剥片剥離作業面の角度をコントロールする技法であるといえる。石刃石核の調整は基本的に剥片剥離作業面の角度を作り出すことにあ

る。

一方、求心状の剥離や打面転移を繁茂に繰り返す石核は基本的に剥片剥離作業面が平坦である。この技法で剥片の形状に最も影響を与えるのは剥片剥離角である。

両者の違いが大きいと判断するか否かが石刃技法成立を考えるうえで重要な鍵になると思われる。

石核調整技術を介在させずに石刃(縦長剥片)を剥離する礫山遺跡の剥離技法が偶発的なものか、并存した様々な剥片剥離技法の中から、意識的に選択されたより新しい技法の萌芽とするかは、先述した二つの技法の差異をどのように評価するかが大きく左右してくるであろう。さらに、つけ加えるならば、綾を形成するよう石核を調整せずに縦長剥片を剥離することができることは礫山遺跡例が示しており、石核調整技法がどのように成立するかが大きな意味をもつと考える。

剥片の縦長化が石刃技法に直線的に結びつくか否か判断できない現状では、沢田鍋土遺跡を変遷段階のどこに置くかは今後の資料の蓄積をまたなければならぬ。

3 中野市周辺の旧石器時代遺跡の様相

沢田鍋土遺跡の周辺には台形様石器を伴う遺跡があり、千曲川に沿う中野市、飯山市など奥信濃地域の旧石器時代の石器群の変遷の概要がおぼろげながら明らかになりつつある。そこで、沢田鍋土遺跡の石器群のもつ重要性を再確認するために、千曲川水系の最北部分・奥信濃の旧石器石器群を概観しておきたい。

奥信濃の旧石器時代石器群は1)斜軸尖頭剥片を伴う石器群、2)明確な台形様石器やナイフ形石器を伴わない石器群、3)真正な石刃技法とナイフ形石器、局部磨製石斧を伴う石器群、4)真正な石刃技法とナイフ形石器を伴う石器群、5)大形の石刃核と縦形の挿器を伴う石器群、6)小型化し打面転移が多々認められる石刃石核と小型のナイフ形石器を伴う石器群7)両面加工の尖頭器を含む石器群、8)細石器石器群、9)縄文時代とすべきかも知れないが大形の木葉形尖頭器石

器群などがある。

1) 斜軸尖頭器剥片を伴う石器群

豊野町南曾峯遺跡の石器群がこの段階に相当すると考えられる。第7回長野県旧石器交流会の席上で若干の発表があったのみで、整理作業が継続中であり、詳細な状況は不明であるが、奥信濃の千曲川水系では最も古い段階の石器群だと考えられる。

斜軸尖頭器状剥片、求心状の石核などが報告されている。

2) 明確にナイフ形石器や台形様石器を伴わない石器群

今回報告した中野市沢田鍋土遺跡が相当するが、沢田鍋土遺跡と隣接するがまん瀧遺跡、中野市牛出遺跡出土の石器群（未報告）もこの石器群に含まれるものとする。

しかしながら、豊野町南曾峯遺跡や沢田鍋土遺跡では石器の出土層や出土層の年代が与えられておらず、断定的なことはいえない。

3) 台形様石器を伴う石器群

中野市立ヶ花表遺跡、沢田鍋土遺跡（中野市調査第1次調査出土）、浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡出土の石器群が相当する。三遺跡はいずれも高丘丘陵上に位置し、比較的狭い地域に分布している。今のところ、飯山市では未発見である。

やはり、長野県の北部に位置するが、千曲川からやや距離をおいた信濃町においても、当該石器群が発見されている。

①立ヶ花表遺跡（第30図）

中野市大字立ヶ花字表に位置し、昭和37年に神田五六、金井汲次らによって調査された。

調査所見によれば、地表下40～70cmの褐色粘質土層から出土し、ひとつの遺物分布集中域を形成していたものと判断される。

黒曜石製のナイフ形石器、台形様石器が検出されている。素材剥片には打面が認められず、全体に大きめである。横広剥片が主体となるが、縦長剥片も認められる。

ナイフ形石器は縦長剥片を素材として、先端部に急角度な調整剥離が認められる。基部にも細かい剥離が認められるが、調整剥離か否か判然としなない。

台形様石器は切断、及び小さな調整剥離によって三角形に成形されている。

②安源寺遺跡（第31図10～19）

中野市大字安源寺字宮裏を中心に広がる弥生時代の遺跡であるが、昭和40年の調査において、旧石器時代の石器が検出されている。いずれも、弥生時代の遺構の覆土等から出土したものである。

第31図19のように典型的な台形様石器、15の様な台形様石器（佐藤分類C類）が含まれている。10は先端部が切断あるいは折れた縦長の剥片の基部に平坦な剥離による基部調整剥離が認められ、ナイフ形石器と考えられる。

③浜津ヶ池遺跡（第31図20～24、第32図25～27）

中野市大字栗林字大壺に所在する。丘陵鞍部に形成された窪地の斜面にあり、昭和35年に神田五六、金井汲次等によって調査された。調査時はナイフ形石器を含む石器群の後半に位置するものと考えられていた。

しかし、AT下位の石器群が明らかになった今日的な視点からみれば、台形様石器を含む石器群と考えられよう。

図版には露出した土層断面が崩れ、表面採集された石器群を提示した。大半が黒曜石製であるが、チャートも混じる。立ヶ花表遺跡と比較すると、やや小さめのものが目立つ。発掘資料中には縦長剥片もある。

第31図20は不定形な縦長剥片の基部に平坦な調整剥離が認められ、ナイフ形石器に分類できよう。

④沢田鍋土遺跡（第32図28～29）

中野市第1次調査ではいわゆるベン先形とされる台形様石器（第32図29）が出土している。中野市第1次調査地点は今回の調査地点の西に隣接する。遺跡は古墳時代の粘土採掘穴によって視乱されおり、出土層等是不明である。

第32図28は黒曜石製のナイフ形石器としてよいであろう。29と同時期と判断する材料はないが、このナイフ形石器を編入すべき石器群が検出されていないことから、ほぼ同時期の所産と考えた。

⑤栗林遺跡(第32図30~34、第33図35~37)

平成5年度、県埋蔵文化財センター調査の栗林遺跡出土の石器群には台形様石器が含まれていないが、第32図30のナイフ形石器は基部を中心に調整剥離が認められ、先述した台形様石器群に伴うナイフ形石器と形態的に類似することから、とりあえずこの石器群に含ませておく。

3) 真正な石刃技法とナイフ形石器、局部磨製石斧を伴う石器群

①太子林(たいしばやし)遺跡(第34、35図)

飯山市瑞穂字太子林に位置する。遺跡は昭和20年代には知られていたようであり、「信濃史料」には縄文時代中期の遺跡として記載されている。

遺跡は新旧二面形成された河岸段丘の下位面に位置するが、河岸段丘は千曲川に流れ込む小河川によっていくつかの舌状の小台地に分断されている。

舌状の台地上に位置していたと考えられるが、頂部の平坦面はすでに削平されており、遺物は小河川に面した台地の斜面を中心に検出された。

遺物分布集中域は三箇所発見されている。いずれの遺物分布集中域も斜面方向に長く伸びる状態で発見されている。遺物のレベル差は30cmを計測する。遺物はかなり急峻であり、本来、遺物が位置していた地点を二次的に移動した結果であるかもしれない。

発見された遺物総数は約600点。ナイフ形石器(6点)、局部磨製石斧(2点)、残核、剥片がある。

ナイフ形石器には中型の縦長剥片を素材として、素材の形態を大きく変形させることなく、基部と先端部に調整加工を施しているもの、やや小形の縦長剥片を素材として、素材を斜めに切断するように先端と基部を調整加工を施しているものの二者がある。素材として、頁岩、黒曜石、安山

岩がもちいられている。

局部磨製石斧は二例とも蛇紋状である。7は正面の頸部に僅かに自然面を残すが、表裏、全面に調整剥離が認められる。刃部は両刃であり、平面形態は僅かに丸みをおびている。研磨は刃部を中心に表裏に認められる。8は横広剥片を素材としたものである。調整剥離は裏面に認められるが、全面に及ぶ様なものではなく、周縁を中心に剥離されている。研磨は顕著には認められない。

石核の素材には大形の剥片が選択されているものがある。したがって、残核の形態は偏平である。石核には上下に二面の打面が用意され、両面からの縦長剥片の剥離が認められる。剥片剥離の作業面は偏平な石核の狭い面が選ばれている。また、縦長剥片剥離に先立ち、作業面に稜を作り出す石核の調整剥離が顕著である。

4) 真正な石刃技法とナイフ形石器を伴う石器群

①小坂遺跡(第36~38図)

下水内郡栄村大字大久保字小坂に位置し、千曲川からの比高約100mの高原状の地形上にある。昭和33年、神田五六、永峯光一によって調査が実施された。

調査はトレンチ方式で、面的な調査は実施されていないが、径数mの範囲内に集中しており、遺物分布集中域を形成していたと思われる。出土層位はA層の直上と判断される。

出土遺物にはナイフ形石器、掻器、形器がある。ナイフ形石器は二側縁加工のもの、基部を中心に先端にも調整剥離が認められるもの、欠損しており全体を見ることはできないが、基部に剥離が認められるものがある。

掻器には縦形が大平をしめるが、縦長剥片のほぼ全周に調整剥離が認められるものがある。

形器には小坂型と呼ばれるもの、ファシットのなす綾が α 状をなすものなどがある。

5) 大型の石刃核と縦形掻器を含む石器群

①新堤(しんつつみ)遺跡(第39図)

飯山市一山中堤3574-1他に位置する。遺跡は

北に向かって流れる小谷の最奥部の水源をU字状に取り巻く微高地の斜面に位置している。調査区は水源を挟む西斜面と東斜面、最奥部の斜面に設定され、遺物は西斜面の途中にある平坦部に発見された。

二箇所の遺物集中域が発見された。第1ブロック、第2ブロックともに径5m、レベル差は約20cmを測る。両者から発見された石器は接合したり、同一母岩を共有している。

発見された遺物総数は106点であるが、定形石器はナイフ形石器2点、搔器3点のみである。残核は2点発見されている。

ナイフ形石器は縦長剥片を素材として、断ち切るように基部側と先端部に調整加工がなされるもの、先端にのみ調整加工が認められるものがある。

残核の両端に打面が認められる。打面には打面調整剥離が認められる。また、剥離の作業面に稜を作り出す側面調整剥離が観察される。出土層位はA T降下層準よりも上部に位置している。

②上野遺跡(第41～42図)

飯山市瑞穂に位置し、調査は一般国道117号線小沼・湯滝バイパスの新設工事に伴い、飯山市教育委員会が実施した。バイパス道路は遺跡の位置する微高地を南北に幅15～20m、長さ約400mにわたって縦断するかたちで、新設される計画であった。したがって、調査区は微高地上の道路建設用地全体に設定された。調査面積5000㎡に及ぶ。

遺跡は千曲川の西岸に形成された微高地の上に位置している。微高地は千曲川の流れに沿い、東西約1400m、南北約300m、千曲川との比高約10mの細長い形状を呈している。

遺構は礫群二箇所と遺物分布集中域五箇所が発見されている。第1号礫群は礫の数70個、2.6×1.4mの規模をもつ。第2号礫群は礫の数130個、2.4×2mの規模をもつ。

遺物分布集中地点は調査区に沿って距離をおいて五箇所検出されているが、いずれも後世の遺構によって攪乱を受けており、明確に断定できない状況である。

遺物としてはナイフ形石器、両面加工の尖頭器、

搔器、残核などがある。

ナイフ形石器(1)は二側縁加工のいわゆる「切り出し形」を呈する。両面加工の尖頭器には木葉形尖頭器(26)、柳葉形尖頭器(27)、ひし形に近いもの(28)、左右非対称のもの(31)がある。搔器は本石器群を特徴づけるものであり、石器総数の約80%を占めている。大きく、縦長搔器、大形の円形搔器、小形の先刃搔器に分ける事ができる。また、縦形搔器にはやや幅広のものや細身のものが含まれており、若干の細分の可能性が指摘できる。残核は石刃核であったとして良いであろう。

本石器群の特徴は何と云っても、搔器の出土数の多さであろう。出土石器総数に対して搔器の占める割合が大きいことは総じて飯山の旧石器石器群に共通するのであるが、こうした事例は関東地方では認められないものである。

搔器は玉髓製のものが大半であるが、玉髓の剥片石核は少ない。したがって、本遺跡が搔器の製作址であった可能性は低い。また、搔器の多さはこの遺跡のみで観察されるものではなく、先ほど述べたように飯山市に共通する石器群のあり方である。この地域のこの期の特徴的な石器組成のあり方としてとらえられよう。

6) 小型化し打面転移が多々認められる石刃石核と小型のナイフ形石器を伴う石器群

①日焼遺跡(第43～47図)

飯山市瑞穂豊日焼・南原に位置し、一般国道117号線、小沼・湯滝バイパスの建設工事に伴って実施された。調査面積は1700㎡に及ぶ。

その結果、小形のナイフ形石器を含む旧石器時代の遺物1992点と6箇所の遺物分布集中域が発見され、規模の大きな旧石器時代の遺跡であることが明らかにされた。

千曲川の右岸に形成された河岸段丘面上に位置する。河岸段丘は東部の山地から千曲川に向かって流れる小河川によって大きく四つの舌状をした微高地状の地形に分断されている。遺跡はその内の一つの舌状を呈する微高地に位置している。

調査区は西に向かって張り出した微高地の中程

を北に斜めに横切るように設定された。

6箇所の遺物分布集中域が検出された。この6箇所の遺物分布集中域が占める面積は900㎡。この調査では遺跡の三分の一度程度の部分を調査したにとどまるので、さらにいくつかの遺物分布集中域が存在しているものと考えられる。

第一遺物分布集中域は9×7mの楕円形であり、レベル差は20cm程である。301点の遺物が検出されている。尖頭器(1)、搔器(12)、残核(1)、剥片で構成されている。

第二遺物分布集中域は7×5mの楕円形を呈している。出土遺物総数は265点。その組成はナイフ形石器(1)、搔器(8)、残核(1)、剥片である。安山岩を素材とするものが50%、黒曜石を素材とするものが48%を占める。

第三遺物分布集中域は現状では8×3mの規模をもつが、半分が失われていると推測される。出土遺物総数は56点。その組成はナイフ形石器(3)、残核(1)、剥片からなる。安山岩を素材とするものが30%、黒曜石を素材とするものが67%を占める。

第四遺物分布集中域は9、5×6mの楕円形を呈する。出土遺物総数は616点。ナイフ形石器(5)、搔器類(44)、残核(11)、剥片等から構成される。石材は黒曜石85、9%、安山岩14%、頁岩0、1%の組成をもつ。

第五遺物分布集中域は12×9mの規模をもつ楕円形であるが、攪乱を受けている。遺物出土総数は392点、ナイフ形石器(3)、搔器類(35)、残核(6)、剥片から構成される。

使用される石材は安山岩が58%、黒曜石が42%である。

第六遺物分布集中域は4×3mの規模をもつ。出土石器総数は362点。ナイフ形石器(7)、搔器類(20)、残核(5)、剥片からなる。

使用される石材は黒曜石が87、5%、安山岩が11%を占める。

本遺跡からはナイフ形石器、半月形尖頭器、搔器、残核等が検出されている。

ナイフ形石器は合計9点検出されているがすべて

黒曜石製である。鋭い縁辺を残し、二側縁を加工した切り出し形ナイフ(27、50、63、64、65)、基部が尖頭状にならないナイフ形石器(28、62)、台形状を呈するナイフ形石器(30、31)、基部の両側縁を加工し、ペン先状の形態をとるもの(29)がある。ナイフ形石器は第一遺物分布集中域を除く各遺物分布集中域から検出されている。

半月形の尖頭器は第一遺物分布集中域から検出された1点のみである。横広剥片を素材として両面加工されている。

搔器には縦長の先刃搔器(59、61等)、やや幅の広い先刃搔器(13、73)、小形の先刃搔器(66、67、68等)、大形の円形の搔器(38、58、60等)、小形の円形搔器(3、5、6、17、32等)、など様々な形態のものがある。

残核には極めて小さなもの(9、25、48)、小形のもの(46、76)、扁平なもの(26、77)などがある。所見石器群は小形のナイフ形石器と搔器類を中心に構成され、関東地方に比較すれば、ナイフ形石器が小形化するナイフ形石器の終末期近くに位置づけられるものと思われる。

検出された残核も小さなものが大半である。残核から推測すると剝離された縦長剥片の長さが2cmに満たないものもあったと考えられる。

また、検出されたナイフ形石器すべてが黒曜石製であることも注目すべきであろう。

7) 両面加工の尖頭器を含む石器群

① 関沢遺跡(第48図)

飯山市大字瑞穂字畔高他に位置し、関沢バイパス建設工事に伴い、実施された。千曲川に西面する河岸段丘上に立地する。河岸段丘は小河川によっていくつかに分断され、西に向かって舌状に張りだした台地状を呈している。遺跡はこうした舌状の台地の先端に位置している。

遺物分布集中域が一箇所発見されている。8×5mの楕円形を呈している。出土石器総数は182点、両面加工の尖頭器、搔器、剥片等から構成される。

使用される石材は頁岩、安山岩、黒曜石がある。

頁岩の占める割合が大きい。遺物 尖頭器には両面加工のもの、片面加工のものがある。両面加工の柳葉形尖頭器（第48図1）、両面加工の木葉形尖頭器（第48図2）、両面加工の半月形尖頭器（第48図3）と片面加工の左右非対称の尖頭器（第48図5、6）、両面加工と片面加工の中間的な加工をされている左右非対称の尖頭器（第48図8、9）など様々な形態のものがある。いずれも頁岩製である。

搔器は縦長剥片を素材として、先端部を尖頭状に加工するもの（第48図4、7、10）。調整加工は平坦剥離による。やや幅広い素材を用いて斜行する刃部を持つもの（第48図11、12、14）、円形搔器に近い形態をもつもの（第48図13）などがある。

8) 細石刃石器群

①千苜遺跡

下水内群木島平村に所在する。遺跡は千曲川に面した段丘面上にある。資料は調査されたものではなく、すべて表面採集資料である。

円筒形の石核、及び契形石核の両者が知られる。表採資料中には両面加工の尖頭器が含まれているが、作出関係は不明である。

9) 木葉形尖頭器石器群

①横倉遺跡（第49～50図）

下水内郡栄村北信地蔵堂に所在し、千曲川に面した段丘面上に立地する。昭和32年に調査が実施され、完形の大型木葉形尖頭器が約40点が検出された。

4 奥信濃の旧石器石器群の変遷と沢田鍋土の石器群

概観してきたように、千曲川水系の奥信濃の旧石器時代石器群は不明瞭な部分が多々あるものの、関東地方の武蔵野ローム第Ⅱ層相²⁴からの石器群が継続していると考えてよいであろう。豊野町の南曾峯遺跡を加えれば、中期旧石器時代—移行期—後期旧石器時代の石器群が存在しているこ

とになる。

1 沢田鍋土遺跡の前段階、2 沢田鍋土遺跡の石器群の段階、3 台形椀石器を含む段階、4 石刃技法とナイフ形石器を伴う段階、5 細石刃石器群の段階に大きく変遷段階を区切ることができよう。

結論が先になったが、奥信濃の後期旧石器群を概観しその変遷を考慮すると、沢田鍋土遺跡の石器群は第3段階以前の石器群として分離できるものと思われる。そこで、沢田鍋土遺跡とそれ以後の段階の石器群、第3段階の石器群とを対比しておきたい。

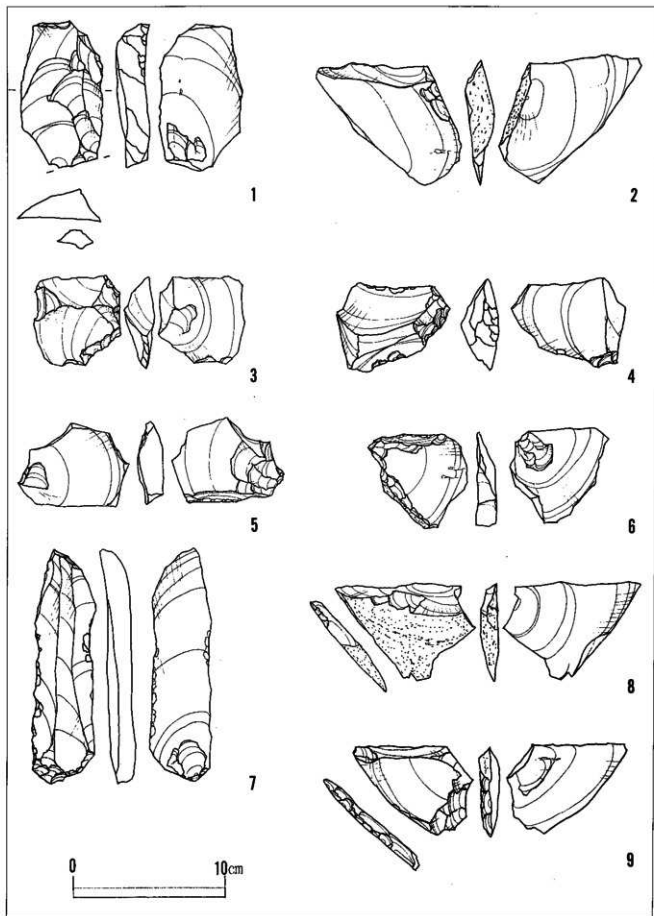
沢田鍋土遺跡には一例ナイフ形石器の形状に類似する石器が検出されている（第12図1）。この例がナイフ形石器のカテゴリーの中で理解されるのかどうか問題となろう。

奥信濃の第3段階（台形椀石器群）の中には、縦長剥片を素材とした基部加工のナイフ形石器が含まれている。これらのナイフ形石器と沢田鍋土遺跡例を比較すると沢田鍋土遺跡例は基部にも調整加工と思われる剥離があるものの、調整剥離は側縁部が中心である。

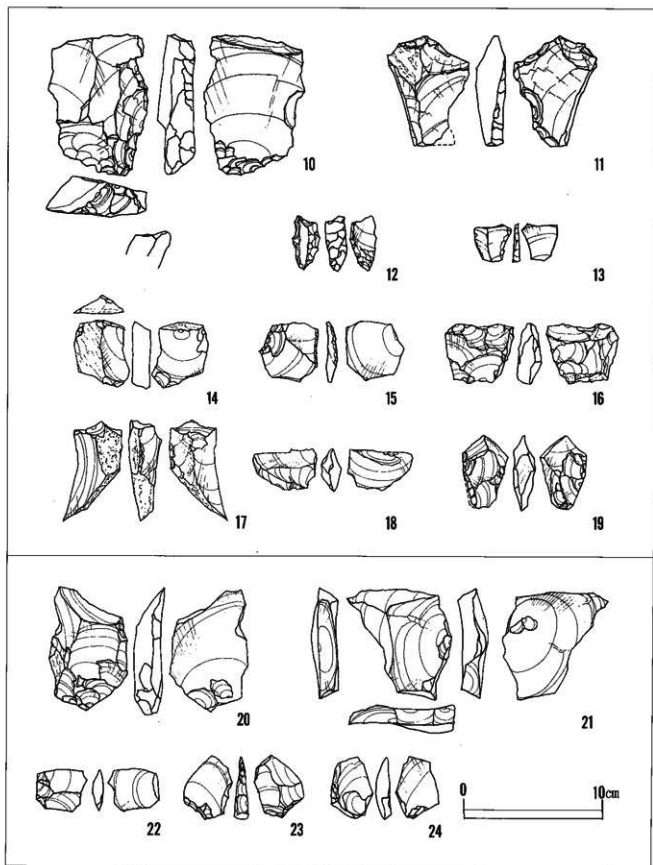
しかし、こうした側縁の調整加工をおこなったナイフ形石器の類例はないわけではない。勝保沢中ノ沢遺跡A地点、房谷戸遺跡第Ⅱ文化層、天引向原遺跡A区大竹遺跡に側縁加工のナイフ形石器がある。群馬県における層位的所見によれば、台形椀石器を含むAT降下以前の石器群のなかでも、中位の古さのものとされている。沢田鍋土遺跡の石器群が第3段階以前に編年されるとすれば、これらのナイフ形石器とは直接的に結びつかない。

ところで、類例としてとりあげた側縁加工のナイフ形石器は、共存する他のタイプのナイフ形石器と比較するとやや横広の剥片が素材として用いられ、ナイフ形石器とは系統の異なる石器群とも考えられる。また、素材となる剥片は細目の三角形を呈したやや横広の剥片であり、より古さのこる剥片剥離技法とも考えられる。したがって、こうした一群の石器を後出的な要素と考えるのではなく、より古相を示している可能性も否定できない。

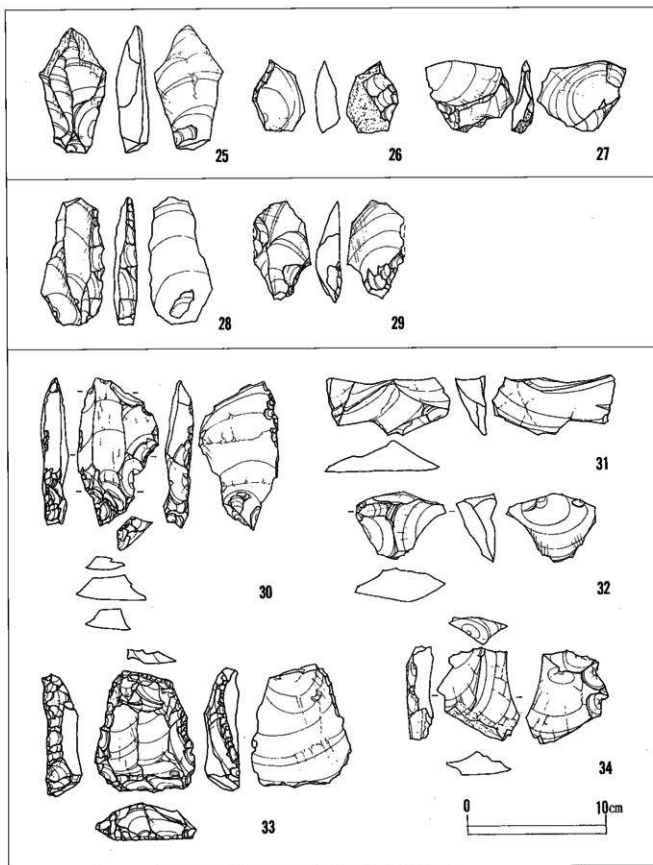
さらに、沢田鍋土遺跡の石器群の編年的位置づけを考えるうえでも重要な要素となる。つまり、沢田鍋土遺跡が台形椀石器以前の段階にはあるが、台形椀石器群の盛行とは時間的にそう隔たつてはいないことを予想させる。



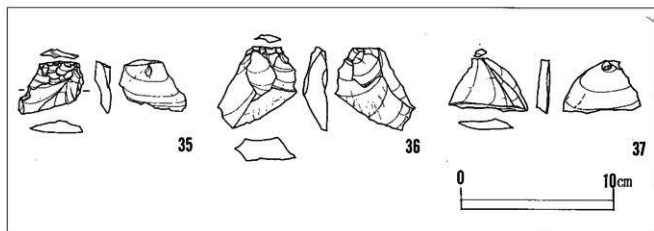
第30図 立ヶ花表遺跡



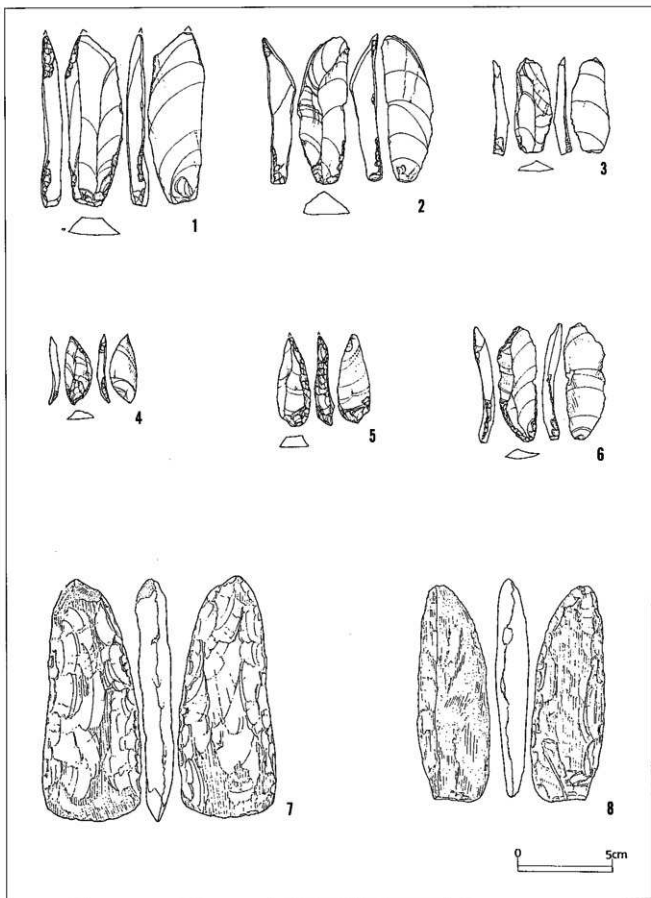
第31図 安源寺・浜津ヶ池遺跡



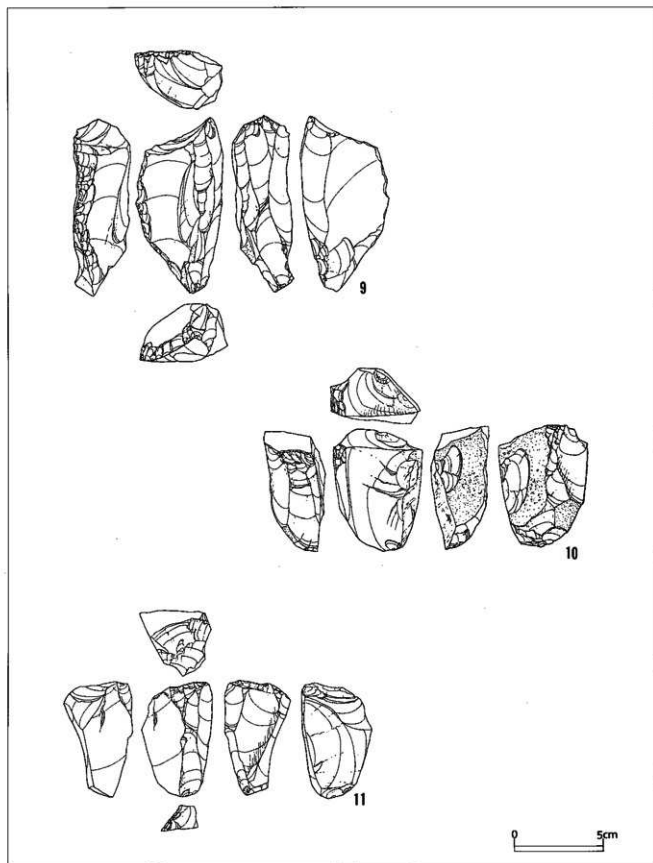
第32図 浜津ヶ池・沢田鍋土・栗林遺跡



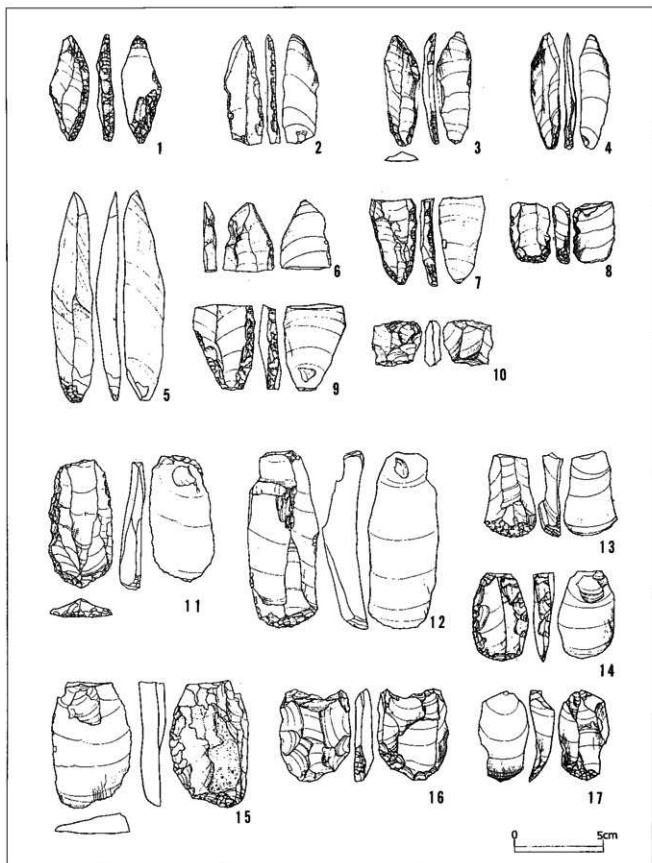
第33圖 栗林遺跡



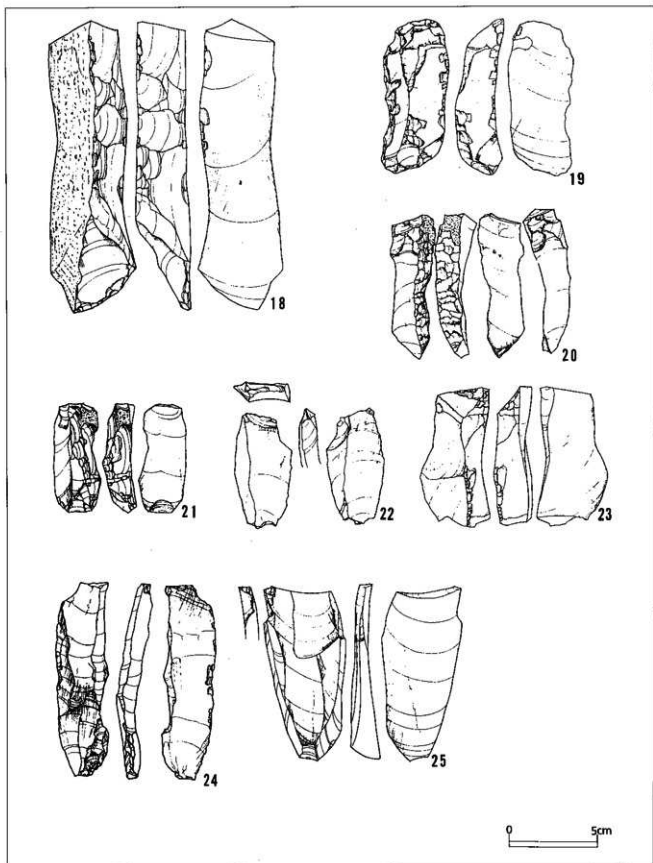
第34圖 太子林遺跡 (1)



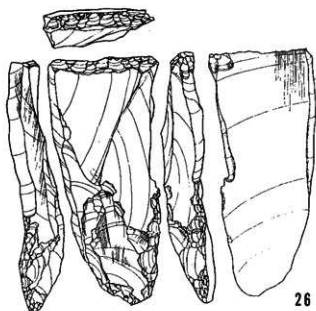
第35圖 太子林遺跡 (2)



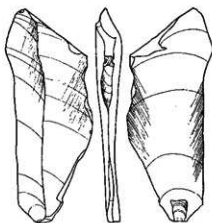
第36圖 小坂遺跡 (1)



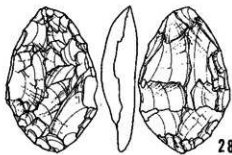
第37圖 小板遺跡 (2)



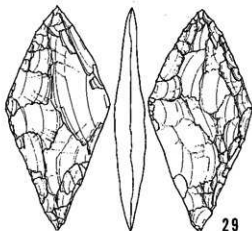
26



27



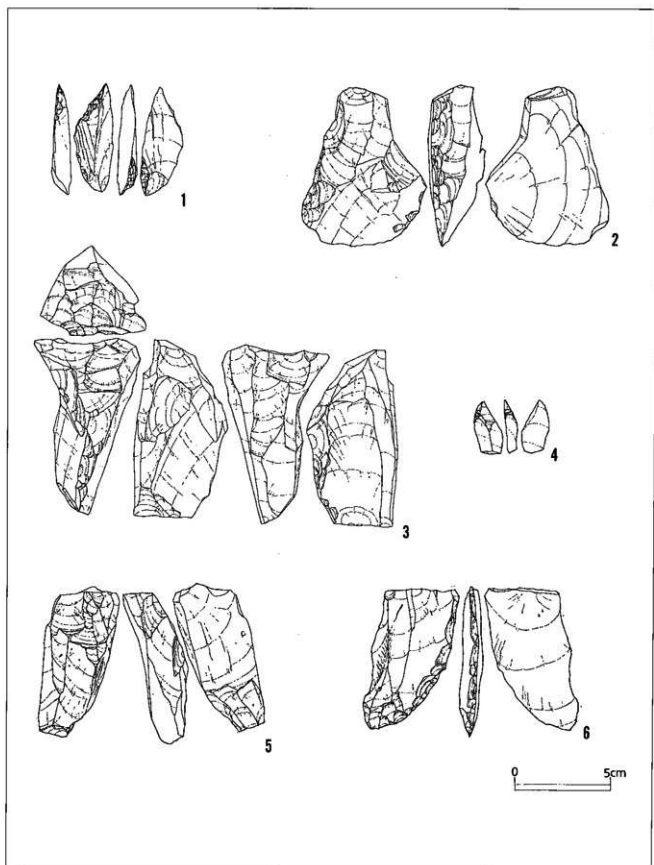
28



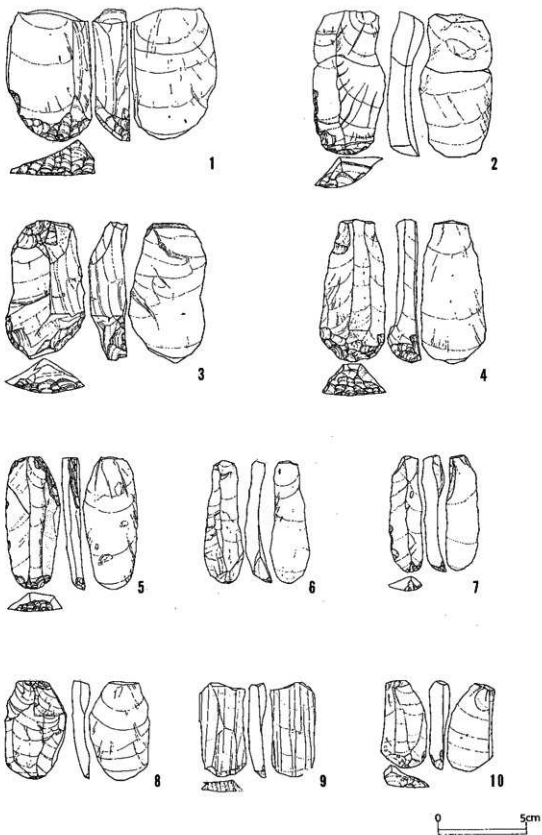
29



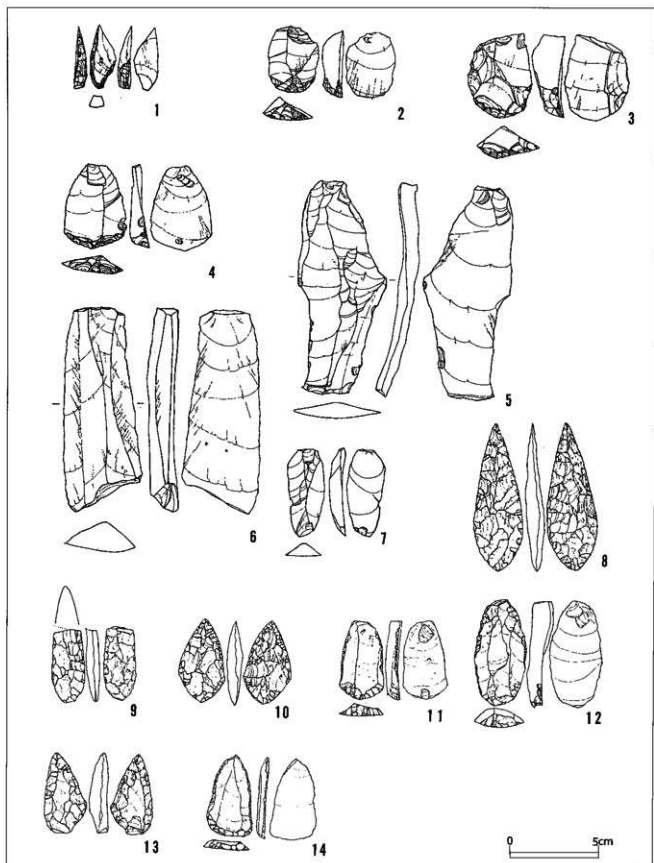
第38圖 小坂遺跡 (3)



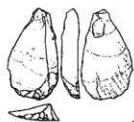
第39回 新地遺跡



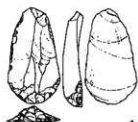
第40図 トトノ池南遺跡



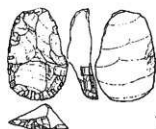
第41回 上野遺跡 (1)



15



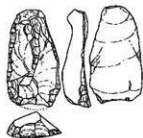
16



17



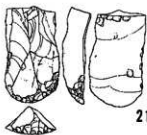
18



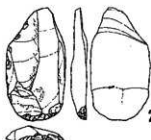
19



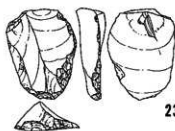
20



21



22



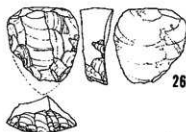
23



24



25



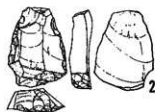
26



27



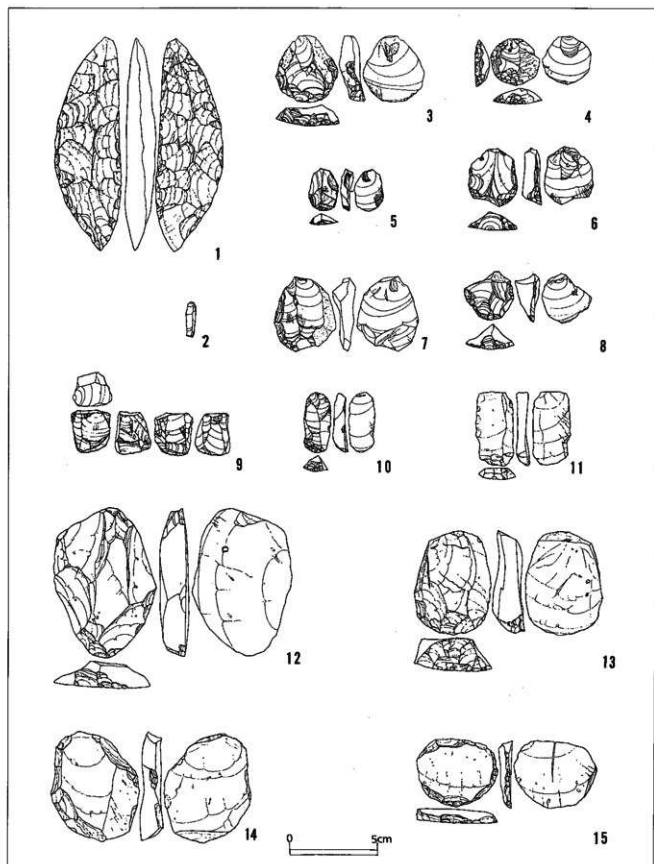
28



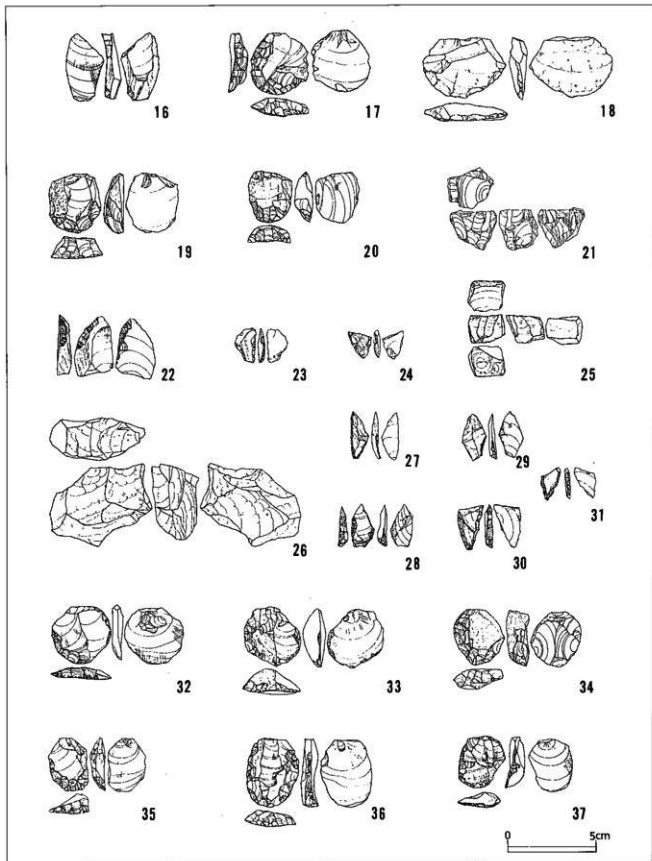
29



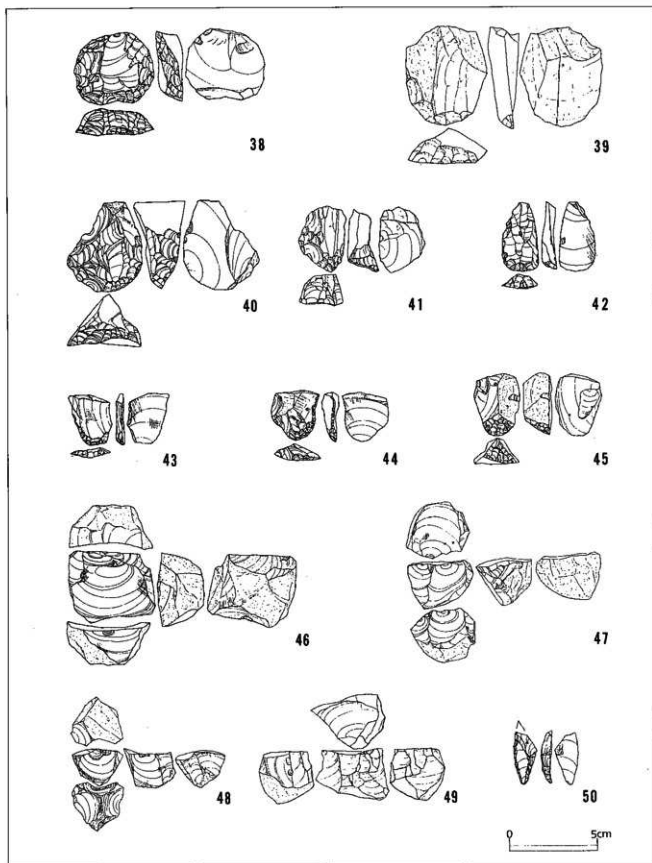
第42図 上野遺跡(2)



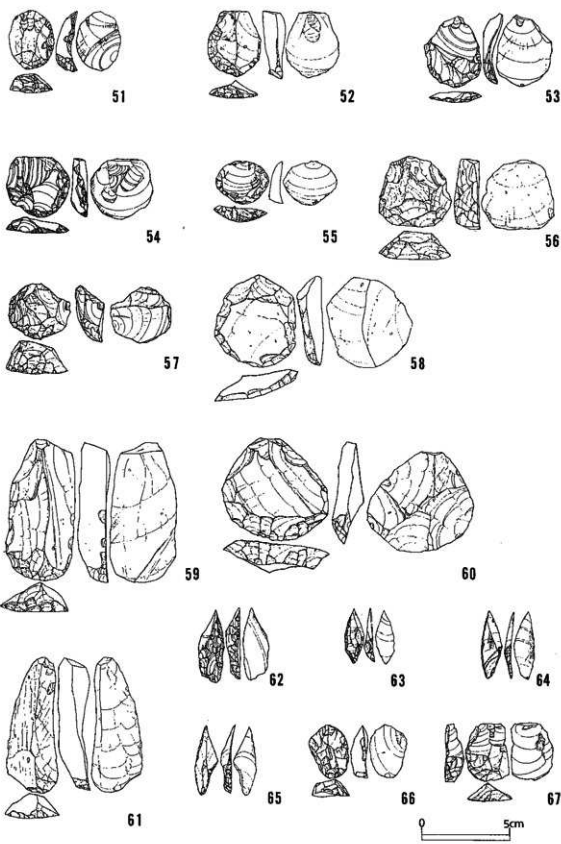
第43圖 日燒遺跡 (1)



第44圖 日燒遺跡 (2)



第45圖 日焼遺跡 (3)



第46図 日焼遺跡 (4)



68



69



70



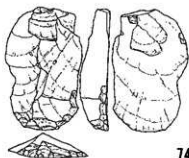
71



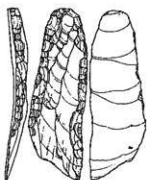
72



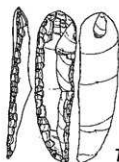
73



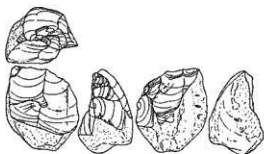
74



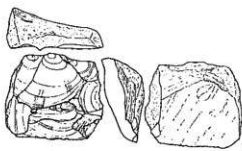
75



76



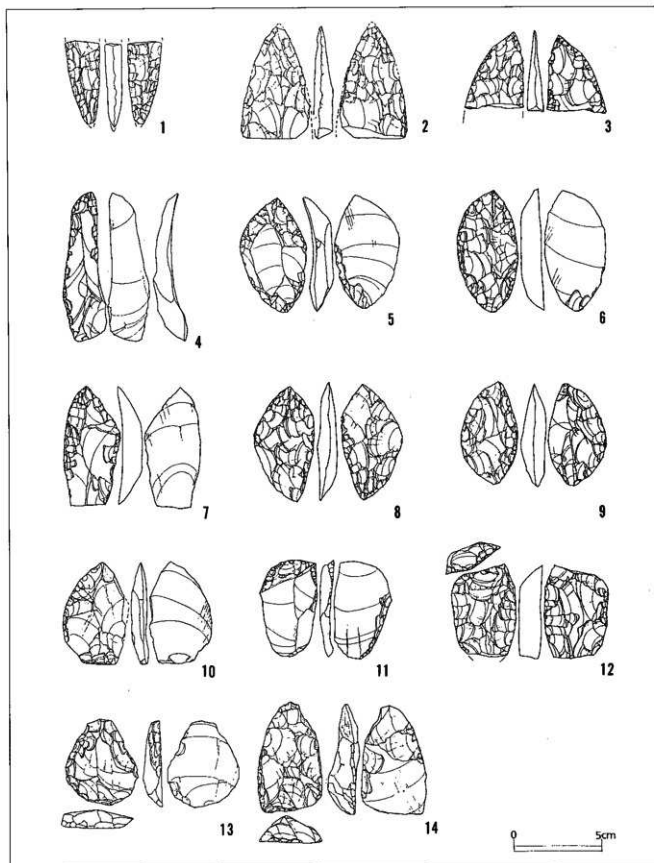
77



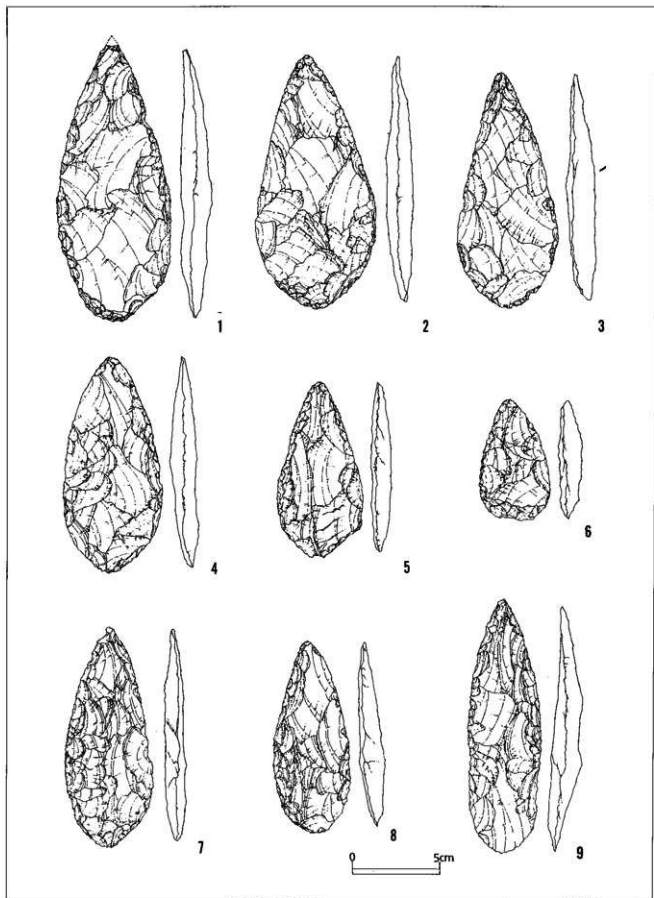
78



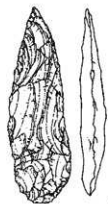
第47圖 日燒通鉢 (5)



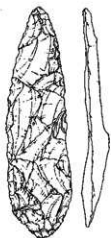
第48圖 關沢遺跡



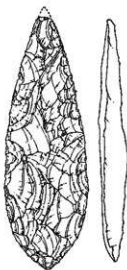
第49圖 横倉遺跡 (1)



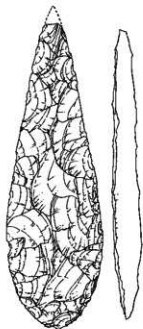
10



11



12



13



14



第50図 横倉遺跡 (2)

第2節 縄文時代

1 第1号土坑出土の中期終末の土器群について

第1号土坑出土の土器群は関東地方に広く分布する加曾利E様式の終末段階の土器群と極めて類似しており、おそらくその時期に並行するものと考えてよいであろう。

ところで、縄文中期の土器編年の詳細な研究が行われて長野県の南半、特に八ヶ岳山麓に代表されるような縄文時代中期の研究とは対照的に、調査された遺跡数の少なさも手伝って、千曲川水系の縄文時代研究は立ちおけているといわざるをえない。

こうした状況にあって、本遺跡出土の土器群がもつ意義を考えるために、千曲川水系の縄文時代中期の土器様相を概観しておきたい。

長野県下における千曲川水系の縄文中期後半に至って加曾利E様式の形勢下に編入されたことが明らかになりつつある。

しかし、千曲川水系の中期前半の土器様相については不明瞭であるが、中野市姥ヶ沢遺跡、飯山市深沢遺跡で中期前半の土器群が比較的まとまって検出されている。

両遺跡からは北陸地方の土器様式と関連をもつ土器群が知られており、中期前半、少なくとも、千曲川水系の一部においては北陸地方の土器様式の形勢下にあったと考えられよう。しかし、千曲川水系全域に分布しているかどうかは明きらかでなく、奥信濃の地理的要素を考慮すべきかも知れない。

・飯山市深沢遺跡出土の土器

深沢遺跡の土器群は西沢隆治によって、次のように三類に分類されている。

第1類 沈線文と半隆起線文で構成される。

第2類 縄文を地文として、隆起線文が多用されるようになり、隆起線文は入組状になる。本類はさらに三段階ほどに細分される可能性がある。

第3類 地文の縄文が消え、隆起線文のみで文様構成される。楔形刻目文が多用されて

いる。

第1類は中期前葉の中段階、第2類は中期前葉中段階から中期中葉にかけての段階、第3類は中期中葉段階のものとしている。

・中野市姥ヶ沢遺跡出土の土器

姥ヶ沢遺跡出土の縄文中期の土器群は次のように分類できる。

第1類 五領ヶ台式土器及びその系譜の中で考えられるもの。

第2類 勝坂様式（猪沢式、新道式の系統下にあると思われる一群）。

第3類 深沢遺跡第2類に相当する一群。

第4類 深沢遺跡第3類に相当する一群。

第5類 口縁部にU字状の弧線文が沈線で施文されるもの。

これらの土器群は総じて、縄文中期前葉から中葉のものと考えられ、大きく二つの流れの理解されるべきであろう。

第1の系統は五領ヶ台式—勝坂様式（猪沢・新道式）という関東地方の土器様式にその系統を求めるべきものであり、第2の系統は新保・新崎様式—上山田様式の流れされる北陸地方と同様の趨勢の中で理解されるべき一群であろう。

しかしながら、現時点ではこれら二つの土器群の系統の相互関係、変遷過程がほとんど明らかにされていない。深沢・姥ヶ沢遺跡出土の土器が、縄文中期前葉から中葉にかけてのものであると推測されるものの、具体的に縄文中期のどの段階に相当するものなのか、またどのように変遷するのかも明かではない。

第2の系統とした北陸地方の土器群と結びつきが想定される土器群も、北陸地方の土器様式と同一か否かが判然としない。全体としての様相には北陸地方の土器群との類似性を、特に深沢遺跡第1類、第2類には数多く数えあげることができるが、全く同一とは考えられないのである。

また、深沢遺跡・姥ヶ沢遺跡出土の土器群が縄文中期前半のすべての土器群を網羅しているかも

判然としない。

奥信濃の縄文中期前半の土器様相については不明な点が多いが、総じて関東地方と北陸地方の影響が色濃く認められることは確かである。また、縄文中期前葉の五領ヶ台様式や中葉段階の初頭に位置づけられる勝坂様式系の土器群などから、縄文中期の当初は関東地方（あるいは八ヶ岳周辺）との結びつきが考えられる。しかし、それ以降は北陸地方と類似するが、独自の地域相を形成するように思える。

このような経過をたどり、縄文中期後半にいたると奥信濃の土器様相はさらに不明瞭になり、中期の最終末段階にいたり、加曾利E様式との類似性の強い土器群が登場する。

千曲川水系（佐久地方や長野盆地）では加曾利E様式の土器群がいくつかの遺跡で検出され、加曾利E 2式からE 4式段階までの土器群が段階的に知られている。唐草紋系の土器や降線文の施文される独特な土器を伴うが、土器群全体の中で加曾利E様式は主体的な土器となっている。

こうした状況から、奥信濃においても加曾利E様式の土器群が存在していた可能性は高いと考えているが、北陸地方に隣接するという地理的条件から判断できないでいる。

一方、千曲川水系からやや離れるが、小川村筏遺跡において、中期後半の好資料が検出されている。胴部に垂下する渦巻の隆線文と矢羽状の沈線文を特徴とする土器群で、(仮称)筏式という型式名が提示されている。分析した寺内は、木曾川流域に分布の中心をもつ唐草文系土器群との関連性を指摘している。

筏遺跡における土器様相は明らかに千曲川水系とは異なっている。(仮称)筏式がどの様な分布圏をもつものなのか今後の資料の蓄積を待たなければならぬが、今後の研究の流れの中では奥信濃の中期後半の土器様相が全く異なるものとなるかも知れない。

しかし、中期最終末段階では、本遺跡、栗林遺跡で認められたように、加曾利E様式の形成下に編入されたことは確かである。また、新潟県新井

市割石遺跡においても認められ、その分布が相当西まで広がることも予想される。

このように、奥信濃の中期土器編年には不確定な要素があるが、中期前葉においては、関東、八ヶ岳山麓との関連が考えられ、中期中葉においては北陸地方との関連性をもちながらも、奥信濃独自の土器様相を形成し、後葉においては関東地方の加曾利E様式に含まれると考えてよいであろう。

さらに、中期最終末段階では、加曾利E様式の土器群は比較的顕著になり、発見された遺跡数も増えている。沢田鍋土遺跡もこうした例のひとつである。

ところで、中期最終末段階から後期初頭の称名寺様式への移行のあり方についてはいくつかの課題が残されている。おそらく、称名寺様式の成立は関東地方であったと考えているが、関東地方内においても地域差があり、多くの地域での様相が明らかにされることが必要である。

沢田鍋土遺跡出土の土器群の段階では、一部地域で称名寺様式の土器群が成立していたとも考えられるが、沢田鍋土遺跡ではそうした様相は明確ではない。しかし、文様モチーフの幅が狭く、帯状に見える部分もあり、称名寺様式への移行への前兆とすることができるかも知れない。

称名寺様式の土器群は中野市栗林遺跡で検出されているが、新しい段階のものであり、中期最終末の間を埋める資料の増加を待ちたい。

いずれにしろ、沢田鍋土遺跡の土器群は奥信濃の縄文中期の土器を考えるうえで重要な資料となろう。当地域ではまだまだ中期全体を視野においた土器群の変遷段階が提唱されたことはなく、それぞれの遺跡における土器群の評価を困難にしている。沢田鍋土遺跡出土の土器群を評価するためにも、長期にわたる土器群の地域編年の確立が望まれる。

第2節 打製石斧の製作

本遺跡では先に報告したように、打製石斧の刃部再製剥片の接合例が見られた。打製石斧は縄文時代の代表的な石器であるにもかかわらず、その製作については不明点が多い。

すでに、打製石斧の製作工程を結果重視形の石器製作工程と位置づけ、旧石器時代の石器製作工程との対比を試みたことがある(中島 1990)。

しかし、打製石斧の製作工程は単に石器づくりの工程を分析するだけでは片手落ちであり、生産、消費、交換といったトータルな構造(経済活動)の復元こそが、縄文時代の社会と旧石器時代の社会、弥生時代の社会を相対化できる方法ではないかと考えた。

さらに、今回の例は、遺跡で打製石斧の製作を示すのではなく、打製石斧の再製を示すものと思われ、打製石斧の製作のサイクル全体を考えるうえで、重要な例となろう。

酒井龍一氏は弥生時代の石器生産を分析する視点石材の採集から、流通、消費にいたる過程を想定し、それぞれの段階での類型化案を提案している(酒井 1991・05)。石器製作を生産と消費の過程の中に位置づけ、大きな構造として石器生産を分析していこうとする試みである。打製石斧の生産、交換、消費を考古学的に分析していく際の大きな指標となる。

打製石斧の製作工程の復元は各氏によって試みられ、石材の採集、打製石斧の製作、消費のあり方については、既に多くの言及があり、現時点では新たに追加すべき新知見はないと考える。しかし、それら各氏の見解は平行線を辿っている部分があり、どの様な議論が今後必要なか、必ずしも明確になっているようには思えない。同時に、それらが打製石斧の生産といった形で体系的に整理されていないのではないかと考える。

本稿では打製石斧の製作工程の復元できる事例を提示し、次にそれを中心に酒井氏の指標に従いながら、打製石斧の生産を概観し、本遺跡出土例のもつ意味について考えてみたい。そうすることで、

僅かながらも、打製石斧研究の課題が見いだせればと考える。

なお、本論の骨子は拙著「打製石斧の製作工程が意味するもの」と同様であり、一部重複する部分がある。お許し願いたい。が、長野県千曲川水系・大竜川水系において、関東の多摩川流域の打製石斧の製作工程と同様の製作工程が認められたこと、生産—消費という経済活動の視点から打製石斧の製作工程を評価しようとした点などが新しい試みである。

(打製石斧の製作工程)

筆者が知り得た打製石斧の製作工程には(1)自然の礫から適当なものを選択し、それに調整剥離を加え打製石斧を製作する転石利用法、(2)適当な礫を半裁し、生じた二枚の剥片に調整剥離を加え、打製石斧を製作する半割り法、(3)適当な礫の表皮を剥離し、調整剥離を加えて打製石斧を製作する方法、(4)その他、おそらく一つにくることができない様々な方法がある。

(1) 転石利用法の事例

長さ、幅、厚さの大きさ、比率が打製石斧の形にちかい転石をそのまま素材として、打製石斧を製作する方法である。この製作方法は剥片の接合資料から明らかにされたものではない。完成した打製石斧の表裏に転石面がそのまま残されることから容易に看取できる。事例を挙げるまでもない。

白石浩之氏は日野市吹上遺跡の打製石斧がこの製作方法で製作されたことを指摘している(白石 1970)。

また、小金井市貫井遺跡の打製石斧を観察した淡江芳浩氏も、打製石斧が従来言われていたように大きな転石の表皮を剥離し、それを素材とした(小田 1967・7)ものではなく、転石利用法で製作されたものが多いことを指摘している(淡江 1979)。

同様に、国分寺市恋ヶ窪遺跡第3 4号住居出土の打製石斧の観察をとうして、砂田住弘氏はこうした打製石斧の製作方法を—素材一品の製作工程

と呼んでいる(砂田 1988)。

転石をそのまま素材として利用する打製石斧の製作方法は関東地方のみではなく、各地に、そして縄文時代の各時期に存在するものと思われる。

筆者の観察した長野県更埴市清水上遺跡の打製石斧(時期は縄文晩期か弥生時代中期)の中にも転石利用法によって製作されたものがある。多摩川流域の各遺跡では楕円形にちかい偏平礫が利用されているが、この遺跡では頁岩の偏平な垂角礫が利用されている。

また、長野県佐久市吹付遺跡の打製石斧を報告した岡村秀雄氏によれば、板状節理によって得られた、まさに板状の素材を露頭から採取し、打製石斧の素材としてそのまま利用しているという(岡村 1991)。

この様に、筆者の管見にふれた事例をとうしても、選択される転石は様々な状況下で手にいれることができる、様々な(打製石斧のプロポーションにちかい)形状のもの利用されている。

(2) 半割法の事例

長さ、幅が打製石斧の比率にほぼちかく、厚さが約二倍強ある礫を半割して打製石斧の素材として利用するものである。

小林公明氏の偏平礫打割法(小林 1991)と極めて類似する。偏平礫打割法はまず適当な門礫を選び、白石に適当な箇所を打ち当て薄く表皮を剥ぐ。これは厚さを調整するための剥離と考えられている。次に同様な方法で礫を半割する。

表皮の剥離を除けば筆者が報告した和田・百草遺跡群第6号住居出土例と同じである。

東京都多摩市和田・百草遺跡群第6号住居例は、住居址覆土から出土した打製石斧2本と剥片6例が接合した例である。2本の打製石斧の表面には自然面が残されている。また、2本の打製石斧は斜交して、裏面と裏面が接合している。

本来の礫の大きさは円礫にちかい長円形のものだと推測される。

接合した剥片は調整剥離の比較的早い段階のものであった。相当大きく剥離しており、結果的に側縁の形状を整えると同時に打製石斧の厚さを調

整することになっている。

また、打製石斧の裏面を横切る様に接合した剥片は、リングが上端と下端の両方向から認められる。白石のような堅いもの上に接して剥離が行われたことを推測させる。打製石斧の側縁に見られる「潰れ」はこうした剥片剥離作業に起因するものかも知れない。

長野県更埴市清水上遺跡出土例

大形の剥片と打製石斧の未製品(?)が接合した例である。剥離面の観察から大形の剥片が三枚剥離されたことが理解される。

復元される元の礫は弁当箱状の垂角礫である。この垂角礫からまず表皮を取り除くように剥片Aが剥離され、次に残された部分が半裁される(B・C剥片)。

調整剥離の認められるB剥片が打製石斧の未製品であるという確証は得られない。この大きさの石器を考えると打製石斧が最も考えやすい。

いずれにしても、大形の剥片が用意でき、打製石斧の素材に十分なり得る。ところで、こうした剥離方法はまさに小林公明氏の偏平礫打割法そのものである。

(3) 剥片利用法の事例

適当な礫の表皮を剥離し、打製石斧の素材とする方法である。古くは大山柏氏の指摘がある。しかし、具体的な事例が指摘できなかったことも事実である。

従来、筆者はこの事例として、東京都多摩市向ヶ丘遺跡で復元した横広剥片の例のみを挙げていたが、長野県更埴市清水上遺跡の打製石斧の観察をとうして、いくつかの方法が細別できることを知った。清水上遺跡の例では表皮を剥離するというよりも輪切りにするような剥片剥離が認められる。表皮の剥離とはやや趣を異にする。

長野県更埴市清水上遺跡出土例

打製石斧の調整剥離が少なく素材剥片の形状が復元できるものがあつた。剥片を剥離した母岩の大きさは復元できない。ただし、剥離された剥片の上下、左右の側縁には礫の自然面が残ること。剥離された剥片が長方形であること等を加味すれ

ば、礫の一面が打製石斧のプロポーシオンにちかい直方体の亜角礫であったと推測できる。

剥片は刺身の短冊から刺身を切りとるように剥離される。したがって、剥片の上下、左右には自然面がそのまま残り、断面は長方形になる。打製石斧の頭部(刃部)にあたる面から剥離された縦長剥片、打製石斧の側縁に当たる面から剥離された横広剥片の両者がある。剥片の剥離が素材剥離と連続的であったかどうかは分からない。

また、亜角礫の縁を利用し、断面三角形の縦長剥片を剥離している例もある。しかし、実際の観察においては礫を半裁する半割法と区別できない。半割法と認定したものは接合資料であるが、この観察は打製石斧の形状からのものであり、場合によってはすべてが半割法で得られた剥片であるかも知れない。打製石斧の素材がどのような形で遺跡に搬入されたのかという問題も加味しなければならぬが、このような剥離をしたと思われる残核が確認できないのは半割法で得られた剥片だからであるという推測も可能である。

東京都多摩市向ヶ岡遺跡出土例は出土した剥片、打製石斧の観察をとうして復元したもので、接合資料ではない。向ヶ岡遺跡では「柿の種」状の大形剥片、あるいはその剥片を半分に折った様な形状の剥片が確認される。この剥片と打製石斧の未製品から推測される素材剥片の形状が一致することから復元した。

打製石斧のプロポーシオンと同様な一面をもち、やや角ばった転石(おそらく多摩川の河原の転石か)を選択し、その表皮を剥ぐように剥離する。全てが幅広剥片である。

長野県恒川遺跡群出土例は両手を添えて持つことができる程度の偏平円礫を選択し、垂直に白石を打ち当てることにより、礫の表皮を剥離する方法が、剥片や打製石斧の分析から復元されている。連続して大形剥片を剥離したケースも明らかにされているが、表皮を剥したものが多くとされる。報告者の桜井弘人氏は偏平礫打割法に分類するが、大山柏氏・小田静夫氏・斉藤基生氏等が指摘する礫の表皮を剥離すると指摘されてきたものの

部類に属するのではないだろうか。

小田静夫氏の復元

小田静夫氏は多摩川中流域の打製石斧の観察をとうして、打製石斧の素材剥片は大きな転石の表皮を剥離したものであると指摘する。転石のどの部分から剥離された剥片を素材とするかによって打製石斧の微妙な形状のバリエーションが生じるとしている。

(4) その他の事例

現段階では普遍化できず、異例と考えられるものである。この様な異例な製作工程が観察されることが打製石斧の製作工程を考える上で重要な点であると考えている。

東京都多摩市和田・百草遺跡群第5・6号住居出土例は異なる住居址の覆土から出土した3点の打製石斧未製品が接合した例である。AとBは側縁が接合し、Bの側縁とCの頭部が接合した。その結果、これらの未製品は石皿を再利用していることが明らかになった。

石皿を横方向から、打製石斧の厚みに合わせて剥離し、板状の素材を剥離する。次に、板状の素材を打製石斧の形状に合わせて切断する。この例では三枚に切断され、それぞれを打製石斧の素材として利用している。

長野県佐久市吹付遺跡の打製石斧を観察した岡村秀雄氏によれば、吹付遺跡の打製石斧は板状の礫を素材としている。この石材は自然状態では、幅の広い板状を呈して産する。そのまま打製石斧の素材とするには大きすぎる。したがって、これを打製石斧の素材として利用するためには適当な大きさに分割する必要がある。分割は先述した和田・百草遺跡群の例のように切断する方法であったと考えられるとのことである。

また、神奈川県尾崎遺跡の片刃石斧の製作工程を復元し、「調整剥離に先だて、あらかじめ切断によって素材の形状を整えることがしばしば行われて」いることを指摘している(鈴木 1977・4)。このように、打製石斧の素材の形態を整えるために、切断という手法がかなり普遍的に採用されていたことが予測される。

東京都国分寺市恋ヶ窪遺跡出土例は砂田住弘氏によって報告された事例である(砂田 1988)。打製石斧の刃部再生の際に生じた大形の剥片を打製石斧の素材として利用して小形の打製石斧を製作している例である。両例の打製石斧とも使用の痕跡が認められるという。

また、大小の差こそあれ、形や剥離のあり方がたいへん良く似ていると指摘されている。

(打製石斧生産)

石器生産のトータルなシステムのあり方を酒井龍一氏は、石材獲得の方法、移動のあり方、石材産出地と石器加工地の関係、加工場所の構造、地域における石器生産のあり方、生産集落のあり方、加工石器の種類、作業工程のあり方、流通範囲のあり方の9項目に分離して分析することを提案している(酒井 1991)。このような視点は今後の打製石斧研究に最も必要とされるべきものであろう。

酒井氏の分析の視点にしたがって、打製石斧の生産のあり方を検討してみたい。しかし、残念ではあるが酒井氏の指摘する各項目がすべて留意されている報告は多くなく、データ不足や筆者の不勉強で、酒井氏の視点を完全にトレースすることはできない。筆者の知り得る範囲で、記述できる項目について記述したい。今後、打製石斧の報告にこうした研究の方向性を満たすデータを記述していく必要があろう。

(石材産出地と石材獲得の方法)

「打製石斧の原材料は手近な所に求められる(斉藤 1991)」という意見に代表されるように身近な産出地で採集されていると考えられる。関東地方の多摩川、荒川流域の遺跡では河床が石材の採集地と考えられる。長野県の天竜川流域においても、河床礫を採集していると考えられている。私の観察した長野県更埴市清水上遺跡例でも河床礫を採集したものと考えた。しかし、河川の特定はできなかった。

「遺跡がこの小台地上に立地する背景としては、平坦な台地であるとともに、台地下を流れる河内川の河床に石器素材としての凝灰岩が多量に含ま

れて」(鈴木 1977) いるからとして、石材の得やすい場所に集落を営むという積極的な考え方もある

また、和田・百草遺跡の石皿を打製石斧の石材にした例のように遺跡内の石材を最利用するような採集のケースもある。長野県佐久市吹付遺跡例のように、露頭から採集していると考えられるケースもある。

特に石材を採掘した場所は認められてない。打製石斧の素材となる石材は多種多様なものが選択されており、今後様々な石材の採集方法が発見される可能性は残されているが、それらは比較的容易な採集方法ではないかと思われる。

(加工場所・石材の移動)

打製石斧は集落内で製作される場合と集落外で製作される場合があると考えられている。

「打製石斧を製作した際に生じたと思われる同石質の剥片が約1800点出土し、それに対して、製品である打製石斧は約1600点出土している。いくら、打製石斧の作りが粗雑とはいえ、1点の製品に対して1.1点程度の剥片しか生じなかったとは考えにくい。このことは主たる製作場所が集落内ではなく集落外にあったことを示している。」(斉藤 1978)。東京都日野市平山橋遺跡では「多摩川に直接面した段丘上の遺跡でありながら、打製石斧の製作の様子は認められない」とされる。

一方、「人形石器である石斧が石材産地の集落で生産され」(鈴木 1985)、「多数の河原石半製品、礫表皮が剥された石核、表皮付剥片、碎片、石などが出土」(小田 1976-07)し、打製石斧の製作痕跡を残す遺跡もあるとされる。

このように、打製石斧の製作場所が集落の内部であったのか、集落の外であったのかは明らかにされていない。

確かに集落内で打製石斧が製作されていたと考えることができよう。そうでなければ、打製石斧と剥片の接合資料は遺跡内で発見されないであろう。

逆に、斉藤氏が指摘するように集落内での石器製作には若干の問題が残る。同時に調整剥離破片

が存在することにも注意しなければならない。これは集落内に持ち込まれた打製石斧の素材が、石材そのものであるのか、半成品にまで加工されたものであるのかといった問題とも関連してこよう。斉藤氏が指摘するような剥片と成品としての打製石斧の数量とのアンバランスは遺跡内に持ち込まれた石材がある程度加工されていた結果を示す可能性もある。

(製作工程)

一般的に、石器の製作過程は(1)原石の入手—(石核調整)—(2)石核の完成—(素材の剥離・調整剥離)—(3)素材の完成—(調整剥離)—(4)成品の完成という過程を経ているものと予想される。こうした過程は全ての石器製作に当てはまるものではあるが、各段階はいくつかの異なる要素が並存している。概ね、こうした過程を単に復元したり、あるはずだと考えることは適当ではなからう。それぞれの石器製作固有の製作過程を差別することが必要であろう。

いままで見てきたように、打製石斧の製作過程はこの製作工程とは異なるものであることが理解される。すなわち、(2)の石核の段階が欠落しているのである。石核が存在することを指摘する研究者はいるが、それは意図したもの(意識して特定の形状の剥片を連続して剥離するため形を整えたもの)ではないと思われる。

このように、石核の段階を欠落させているにも関わらず、素材を剥離するための原石の状態には様々なものがある。やや大きい扁平な円礫、中型の扁平礫、垂角礫、節理面で割れた板状の原石、石皿を再利用したもの、石器の再生剥片を利用したものなど多種多様である。地域差も認められるが、同一遺跡内においても認められる。

石核の製作過程を分析した鈴木俊成氏は「作り手は目指す製品(石鏃)の形状と素材剥片とをイメージの中でだぶらせ、素材剥片を選択した」と指摘するが(鈴木 1992:03)、打製石斧の作り手は打製石斧の形状と素材となる原石の形状とをイメージの中でだぶらせ、素材を作出する技法を選択しているといえることができる。

一定規格の剥片を得るためになされる石核調整から石器の完成までが、特定の剥離技術と結び付き、しかも手順として確立している旧石器時代の石器製作と比較したとき、打製石斧の製作方法はいかにも危うく見える。入手できた原石に合わせて技法を選び、望む剥片を作出し、成品に加工する。有り合わせの材料に合わせて技法を選択し、結果として打製石斧を製作する。

このような石器製作を「結果重視形」と呼んで、旧石器時代の石器製作と区別したいと考える。こうした結果重視形の石器製作は技法の特殊性としてのみ分析するのではなく、材料の入手から製作地へ搬入(あるいは移動)のあり方、そして消費地はどこか、消費地までどのように運ばれるのか、トータルシステムとして、検討してみることが必要であろう。

(流通と消費)

富山県「境A遺跡から出土した膨大な量の石器(磨製石斧)は縄文時代における石器製作に関するそれまでの既成の概念—すなわち、それぞれの集落で使用する石器は原則的に自給自足の生産であるとする—に疑問を投げかけるものであった」(山本 1991:05)。「早川天神森遺跡では石鏃などの小型の石器のみを生産し、打製上掘具や磨製石斧などはそのほとんどを集落内で生産していなかった」(鈴木 1985:08)。「大形石器である石斧が石材産地の集落で生産されて、他の遺跡に供給されたことを示す」(鈴木 1985:08)。多量の打製石斧の生産は他の遺跡に供給されることが背景であるとする考え方があろう。

他方、打製石斧の「爆発的増加の背景には何が考えられるのであろうか。これらが周辺地域への打製石斧の供給地になったとする見方もあるが、これはとても遺跡内から大量に出土することの説明には不十分である」(斉藤 1991:05)。「どのように大切な石器であっても、他の石器などと一括して、廃棄される運命にあったのである。完形品が全体の半数以上もあり捨てられていた事実は季節的に新しい石器と交代する慣習や、また入手すべく多摩川の河原に出かける時期が決められたい

たのかもしれない」(小田 1976・07)。あるいは「地下デンプンを含む植物の採取抜きには考えられない。そしてそれらに対するある種の過剰反応が多摩川流域・信州地方にあった」(斎藤 1991・5)とする考え方もある。

(打製石斧製作工程の評価)

打製石斧の生産のあり方は各氏によって、若干ずつその見解が異なるものの、その膨大な生産量とその地域的な遍在が大きな課題となっているとすることができよう。石材の採集は各氏とも身近なところであるとする点では一致するし、大量に生産されていたことも一致するところである。こうした事象をどの様に評価するか、すなわち自給自足的な経済活動と考えるのか、交換を前提とした経済活動と考えるかは意見の分かれるところである。

ところで、打製石斧の製作工程はこうした大量生産とは密接に結び付いたものであり、大量の生産を保障する大きな要素であったと理解できよう。逆にいえばこの様な経済システムの要求に打製石斧の製作工程はどの様に対応したのであろうか。

旧石器時代の石器製作は石材から石核を製作し、その石核から石器の素材となる剥片を剥離し、素材剥片を石器に加工するという手順を踏む。石材の選択、石核の製作、素材剥片の剥離、石器の加工というプロセスが一連の有機的流れとして一環している。特に、石器の素材となる剥片が規格的に、しかも連続して剥離される。

このような石器製作工程は限られた石材を有効に利用する方法と評価することができよう。こうしたプロセスを踏む石器製作を手順重視形と呼んでおきたい。一方、打製石斧の製作工程は規格的な素材剥片を連続して剥離するための石核を製作しない。また、石材から直接打製石斧製作したり、素材剥片を剥離するにしても、素材剥片の剥離方法に一定の方法がない。結果として、打製石斧が製作できれば良いとするような石器製作工程である。このような石器製作を結果重視形と呼ぶ。

限られた石材から効果的に石器を製作するとい

う視点からみれば、結果重視形の石器製作は手順重視形の石器製作と比較し、劣っている。仮に、限られた石材しか入手できないとすれば、結果重視形の製作工程は大量な打製石斧の生産をすることは不可能であったに違いない。逆に、石材が大量に入手できる状況であれば、結果重視形の石器製作の方が大量の石器生産に適していると考えられよう。

打製石斧の石材は多くの場合、河床礫が選択されており、大量に打製石斧を出土する遺跡はそうした河川に比較的近いところに位置している。鈴木次郎氏のように集落を河川に近い地点に設営したとさえ解釈できるケースもある。

石材の産出地近くの遺跡立地は結果重視形の石器製作と深く結び付いたものであろう。しかし、石材の産出地近くに集落を営む故に、結果重視形の石器製作が出現したのか、結果重視形の石器製作故に石材の産出地に集落が近づいたのかは分からない。

ところで、結果重視形の石器製作の出現はいつ頃に求められるのであろうか。筆者は起源を縄文時代草創期の木葉形尖頭器の製作に求めたい。

たとえば、東京都秋川市前田耕地遺跡で復元された木葉形尖頭器の製作には a) 適当な大きさの河原石を半裁して素材とし、木葉形尖頭器を製作するもの、b) 適当な大きさの河原石を素材として、そのまま利用するもの、c) 縦長剥片を素材とするものと三種類の製作工程が復元されている(橋口1985)。a、bは打製石斧の製作工程でも認められるものであるし、cの例も存在する。

そして、河原石を素材とし、石材産出地と石器製作場所が近接し、まったく同様とはいえないが打製石斧の製作工程と良く似た製作工程が用いられ、一つの器種の製作に複数の技法が採用され、しかも大量に一器種を製作されている。こうしたあり方は打製石斧の製作工程と良く似ていると判断されよう。

集落、ないし石器製作の場の河原への近接、定住化の傾向といった要素が結果重視形の石器製作の出現と結び付いているのかも知れない。

さて、打製石斧の製作工程に見られるような結果重視形の石器製作は縄文時代の開始とそう時間を経ずに登場したが、草創期以降、早期、前期では顕著ではなくなる。大形石器が減少するためかもしれない。

しかし、東京都町田市真光遺跡の縄文早期の石器群を観察した小杉康は扇状剥片を抽出し、その製作過程を復元しているが、それが礫の半割法と筆者が呼ぶものと類似しているように思う。いずれにしろ、早期に草創期にみられた石器製作工程が余り顕著でないのは事実であり、今後の課題である。

(まとめ)

打製石斧の製作に用いられる石材の形状は様々である。石材をそのまま打製石斧に製作する場合もある。石材から素材剥片を剝離し、打製石斧を製作することもある。石材の形状によって製作の過程が選択される。素材剥片の剝離の方法はいくつもの方法がある。石材の特性に合わせて、素材剥片の剝離方法が選択される。極端ではあるが結果として打製石斧が完成すれば良い。こうした打製石斧の製作を結果重視形の石器製作と呼びたい。

打製石斧の生産の特徴はその生産量の多さである。打製石斧の大量生産は打製石斧の生産のシステム全体の課題である。結果重視形の打製石斧製作工程はこうした必要性に満たすためのものである。しかし、結果重視形の製作工程のみでは打製石斧の大量生産は成立しない。生産と消費という大きな構造の一要素である。石材の産出地、石材の入手の方法、その量、生産量などと密接に結びついたものと考えられる。

石材を河川の河床礫に求めたこと、比較的河川に近い地点に集落を営むことで、大量の石材が容易に入手できたことが、結果重視形の石器製作が可能になった大きな要素であろう。石材が集落内に持ち込まれたのか、河床で素材製作をしたのかははっきりしない。しかし、いずれかの方法で大量の石材が確保されたと考えることができよう。

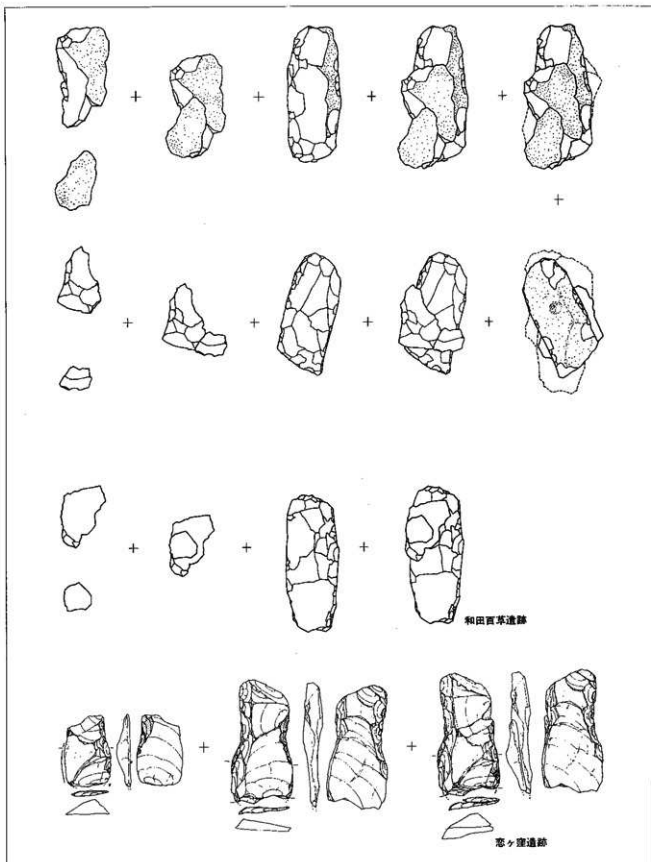
こうした石器生産のあり方は縄文時代草創期の

木葉形尖頭器の製作にも認められ、縄文時代の起源とも関連した石器生産体制であると考えられる。木葉形尖頭器の素材は河床に求められ、大量の生産、そして石核の段階をもたない。また、複数の製作工程が存在する。こうしたあり方は打製石斧の製作工程と多くの類似点をもっている。

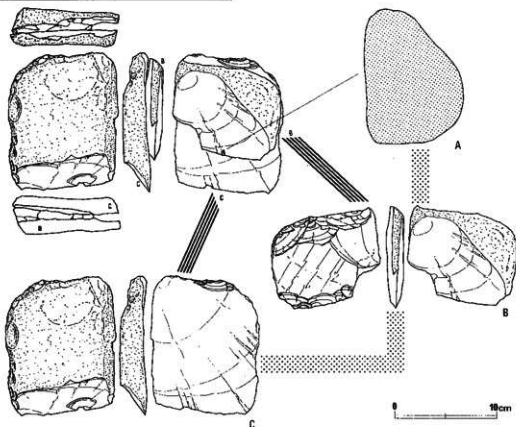
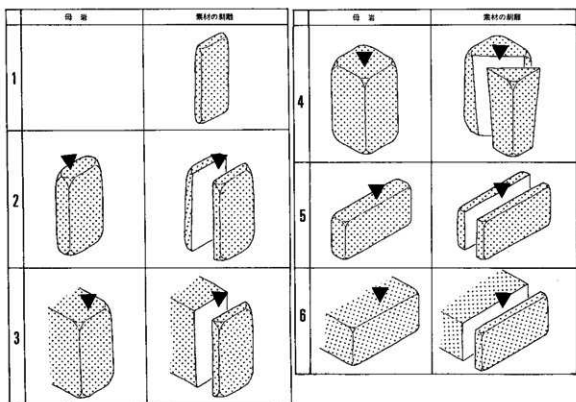
それでは、なぜ打製石斧は大量生産されたのであろうか。いくつかの見解がある。打製石斧が生産地から別の地域へ供給されたから、地下デンプン採取のために製作地の集落に白給するため、季節的生産と廃棄がその原因ではないか等が代表的な見解である。定説にまではいずれも至らない。しかし、この課題が最も打製石斧の研究で重要な点となろう。

仮に、別地域への供給の為とすれば、どの様な交換がそこで行われているのかを議論しなければならない。今日的な交換（交易）がイメージされているとすれば、縄文時代にはすでに市場経済が誕生していたことになる。互酬性による交換は大量生産の説明にならない。交換も大量生産の説明には不向きである。小杉康は縄文時代前期にクラ的な交換の連鎖を縄文前期に想定したが、こうした交換も大量生産には無関係であろう。いずれにしろ、他地域へ供給されたとするだけでなく、どのような交換の形態で交換されたかを検討するデータを用意しなければならないだろう。

しかし、経済人類学の教えるところによれば、生産—消費という経済活動は社会制度そのものに埋め込まれたものであるとされ、縄文時代の社会を重大な手がかりを与えてくれると考えられる。



第51図 打製石斧の接合例



第52図 打製石斧の素材模式図 (清水上遺跡)

安斉正人	1988	「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行」『先史考古学研究』
飯村 潔他	1965	「茨城県山方遺跡から発見された石器についての予察」『地球科学』
大山 柏	1927	「打製石斧」『論集日本文化の起源第1巻 考古学』
岡村道雄	1972	「飯田市地内 その3—石了原遺跡の旧石器」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
小田静夫	1976.7	「縄文中期の打製の石斧」『季刊 どるめん』10
木本元治他	1975	「平林遺跡」『福島県文化財調査報告書47』
小林公明	1991.5	「新石器的石器の製作技術」『季刊 考古学』第35号
齋藤基生	1978	「第7章第6節 中期の石器」『貫井』小金井市文化財調査報告書5
〃	1991.5	「打製石斧の性格」『季刊 考古学』第35号
酒井龍一	1991.5	「弥生時代の石器生産」『季刊 考古学』第35号
佐藤達夫	1976	「茨城県山方遺跡調査報告」『茨城県史研究』
渋谷芳浩	1979	「3 石器」『小金井市貫井遺跡 NUKUI SITE』
白石浩之	1970	「打製石器の製作技術論」『H野吹上遺跡』
鈴木二郎	1977.4	「縄文時代の直刃打製石斧について —神奈川県尾崎遺跡の出土例を中心として—」『神奈川考古』第2号
〃	1985.8	「石斧の大量生産」『季刊 考古学』第12号
鈴木俊成	1992.3	「縄文時代の石鏃について」『新潟考古』第3号
砂田佳弘	1988	「恋ヶ窪遺跡出土の打製石斧」『東京の遺跡』No.20
橋口美子	1985	「縄文時代草創期の尖頭器製作について」『東京考古』3
山本正敏	1991.5	「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊 考古学』第35号

写真図版



調査風景



調査風景（第2遺物分布集中域）



第2遺物分布集中城（東から）



第2遺物分布集中城（西から）



第2遺物分布集中域（北から）と第1住居址



第3遺物分布集中域（西から）



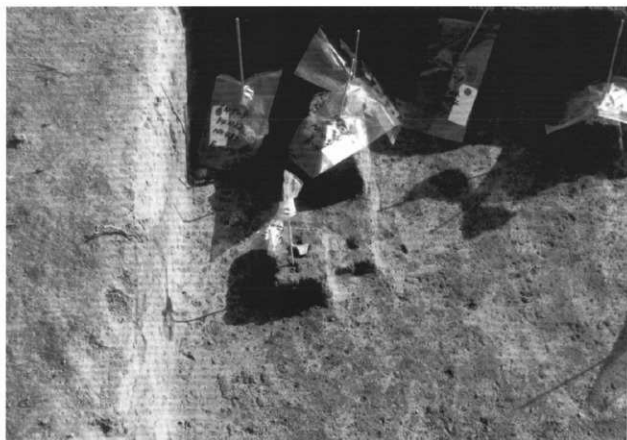
遺物出土状況近影（第2遺物分布集中域）



遺物出土状況近影



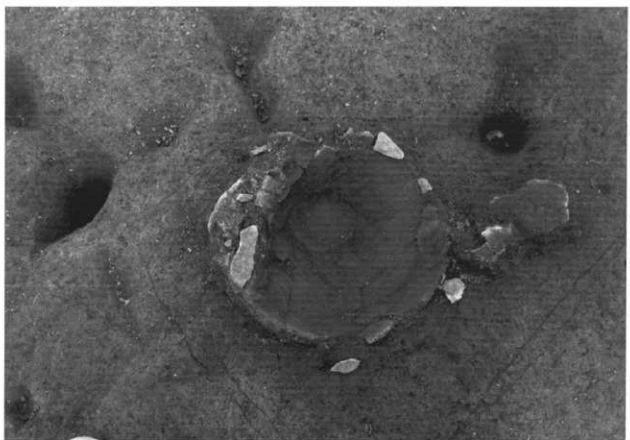
遺物出土状況近影



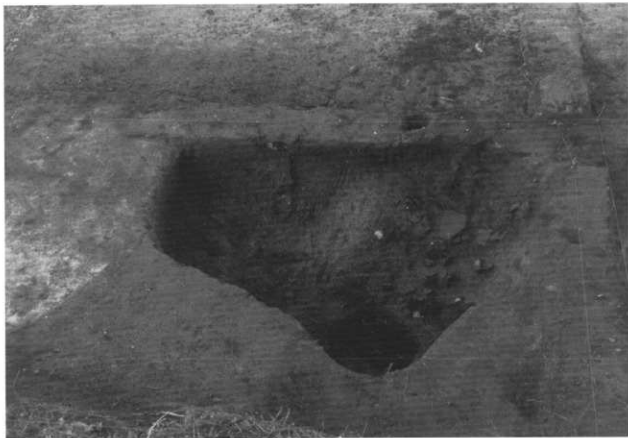
遺物出土状況近影



石核出土状况



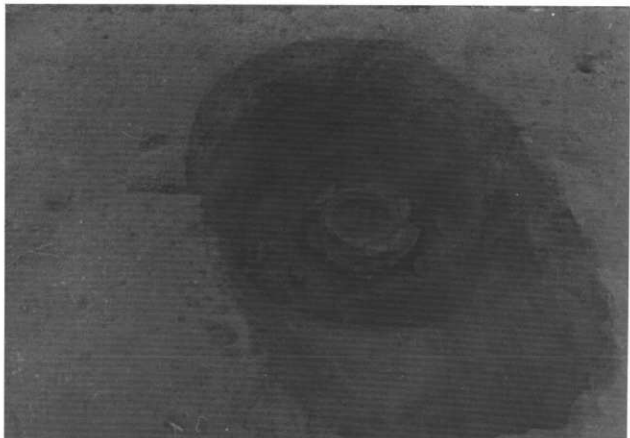
第1号住居伊踏



第1号土坑



第1号土坑



第6号土坑内遺物出土狀況



第6号土坑内遺物出土狀況



第8号土坑



粘土採掘跡（調査区最東区の様子）





**長野県中野市
沢田鍋土遺跡 発掘調査報告書**

印 刷 平成7年3月20日
発 行 日 平成7年3月31日
編 集 ・ 発 行 中野市教育委員会
中野市三好町1-3-19
印 刷 所 カシヨ株式会社

